

大藪遺跡・大藪城跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

大藪遺跡・大藪城跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、道路整備事業に伴う大藪遺跡・大藪城跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

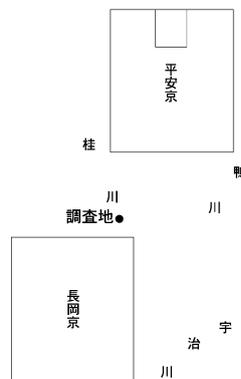
平成 22 年 11 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 大藪遺跡・大藪城跡
- 2 調査所在地 京都市南区久世大藪町・築山町地内
- 3 委 託 者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2010年4月15日～2010年7月23日
- 5 調査面積 760 m²
- 6 調査担当者 木下保明・近藤章子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「久世」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構表示記号 奈良文化財研究所の用例を一部調整して使用した。
SA：柵、SB：掘立柱建物、SD：溝・堀、SE：井戸、SK：土坑、
SL：畦畔、SN：水田
- 12 遺構番号 現場で付けた番号を使用し、遺構表示記号を前につけた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 本書作成 木下保明・近藤章子・竜子正彦
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	5
(1) 遺構の概要	5
(2) 1区の遺構	5
(3) 2区の遺構	22
4. 遺 物	24
(1) 遺物の概要	24
(2) 土器類	25
(3) 木製品	32
(4) その他の遺物	34
(5) 自然遺物	36
5. ま と め	40

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区東半全景 [室町時代後期から江戸時代初期] (西から)
		2	1区西半全景 [室町時代後期から江戸時代初期] (西から)
図版2	遺構	1	1区SB 1・2 (北から)
		2	1区SB 1 (南から)
		3	1区SB 2 (南から)
図版3	遺構	1	1区SB 2 P70 (東から)
		2	1区SB 2 P82 (西から)
		3	1区SB 2 P121 (西から)
		4	1区SB 2 P122 (東から)
		5	1区SB 1 P77 (南から)
		6	1区P234 (西から)

	7	1区 SK98 (北東から)
	8	1区 SK370 (東から)
図版 4	遺構	1 1区 SD170 (西から)
	2	1区 SD170 遺物出土状況 1 (南東から)
	3	1区 SD170 遺物出土状況 2 (南から)
	4	1区 SD50 遺物出土状況 (北から)
	5	1区 SD151 遺物出土状況 (南から)
図版 5	遺構	1 1区東半全景 [江戸時代後期] (西から)
	2	1区西半全景 [江戸時代後期] (西から)
図版 6	遺構	1 1区 SE160 (東から)
	2	1区 SE175 (東から)
図版 7	遺構	1 1区 SK139 上面 (北から)
	2	1区 SK139 下面 (南から)
	3	1区 SD145 (南西から)
	4	1区整地層内地業 (西から)
	5	1区 SK141 (北から)
	6	1区 SK147 (北から)
	7	1区 SK245 (北から)
	8	1区 SK376 (東から)
図版 8	遺構	1 2区全景 (東から)
	2	2区 SK 6・7 (東から)
図版 9	遺物	1区 SD170 出土土器
図版 10	遺物	1区整地層、SD255、SK141・250、2区 SK 7 出土土器
図版 11	遺物	1区出土木製品
図版 12	遺物	1 2区出土瓦類、土製品
	2	1区出土金属製品
	3	1区出土石製品
	4	1区出土土製品

挿 図 目 次

図 1	調査前全景 (西から)	1
図 2	作業風景	1

図 3	調査区および周辺の調査位置図 (1 : 5000)	2
図 4	調査区配置図 (1 : 1,000)	4
図 5	1 区南壁・東壁断面図 (1 : 100)	6
図 6	1 区遺構平面図 1 [室町時代後期から江戸時代初期] (1 : 200)	8
図 7	1 区 SB 1 実測図 (1 : 50)	9
図 8	1 区 SB 2 実測図 (1 : 50)	10
図 9	1 区 SB 3・SA 4 実測図 (1 : 50)	11
図 10	1 区 SD151・170・341、SK60 断面図、SK342・365 実測図 (1 : 50)	13
図 11	1 区 SK370 実測図 (1 : 20)	14
図 12	1 区遺構平面図 2 [江戸時代後期 2] (1 : 200)	15
図 13	1 区 SE160・175、SK147 実測図 (1 : 50)	16
図 14	1 区 SK 1・150・182・183 実測図 (1 : 50)	18
図 15	1 区遺構平面図 3 [江戸時代後期 1] (1 : 200)	20
図 16	1 区 SK141、SD145 平面図、SK139 実測図 (1 : 50)	21
図 17	2 区遺構実測図 (1 : 50)	23
図 18	1 区出土土器実測図 1 [古墳時代] (1 : 4)	25
図 19	1 区出土土器実測図 2 [室町時代後期から江戸時代初期] (1 : 4)	26
図 20	1 区出土土器実測図 3 [室町時代後期から江戸時代初期] (1 : 4)	28
図 21	1 区出土土器実測図 4 [江戸時代後期] (1 : 4)	30
図 22	2 区出土土器実測図 [長岡京期] (1 : 4)	31
図 23	木製品実測図 1 [室町時代後期から江戸時代初期] (1 : 4)	33
図 24	木製品実測図 2 [江戸時代後期] (1 : 4)	34
図 25	瓦類・石製品・金属製品・土製品実測図 (1 : 4)、銭貨拓影 (1 : 2)	35
図 26	種実等 1	38
図 27	種実等 2	39

表 目 次

表 1	周辺の調査一覧表	3
表 2	遺構概要表	5
表 3	遺物概要表	24
表 4	種実等一覧表	37

大藪遺跡・大藪城跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は、国道171号線と国道1号線を結ぶ都市計画道路（3.3.132 向日町上烏羽線）の整備事業に伴って実施した発掘調査である。調査地は、京都市南区久世大藪町・築山町地内に位置し、弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡である大藪遺跡、中世の居館跡である大藪城跡に含まれている。

調査に先立ち、京都市建設局道路建設課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）、財団法人京都市埋蔵文化財研究所で協議し、調査区の位置の確定、近隣住民への説明など事前調整を実施した。

(2) 調査の経過

調査は2010年4月15日に、フェンス・プレハブの設置などの付帯工事を実施することから開始した。

調査区は大きく2箇所の調査区に分かれ、西側の調査区を1区、東側の調査区を2区とした。また、1区では、敷地内で掘削土を処理する必要があったため、東西に二分して調査を実施した。本格的調査は、4月19日から1区の東半部の重機掘削を開始し、7月23日に終了した。

調査中、文化財保護課の現地指導を、4月19日、4月23日、5月10日、5月18日、6月9日、6月28日の計6回受けた。また、当研究所の検証委員である鈴木久男氏（京都産業大学教授）、高正龍氏（立命館大学教授）の臨検を、4月21日（鈴木・高教授）、7月6日（鈴木教授）、7月7日（高教授）の計3回受けた。



図1 調査前全景（西から）



図2 作業風景

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は京都市の南西部にあたり、国道171号線の東約400mの大藪集落内に位置し、西を向日丘陵、東を桂川に挟まれた、桂川の後背湿地から微高地に移る地点に立地し、大藪遺跡・大藪城跡のどちらとも遺跡の東限近くに当たっている。大藪集落は、中央を南北に縦断する旧西国街道に繋がる古くからの道路である大藪街道に沿って営まれた南北に細長い集落である。大藪の名は、暦応三年(1340)の上久世庄絵図に「本久世 大ヤフ」と記された小規模な京郊荘園として登場する。その後、在地の有力者によって大藪城が造営されたとするが、築造年代、存続期間など詳細は不明である。

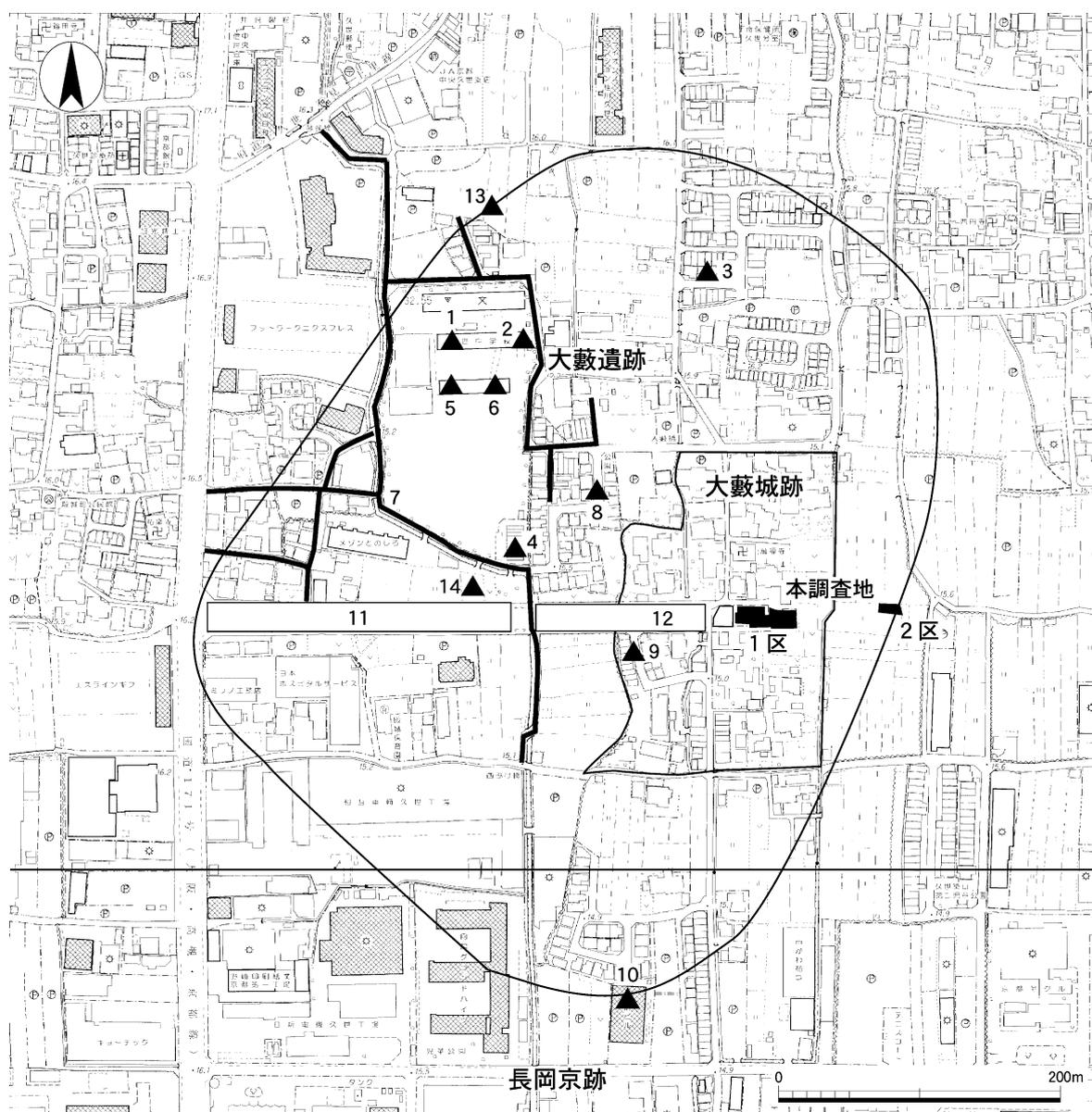


図3 調査区および周辺の調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺の調査一覧表

No.	調査種類 面積 (㎡)	調査期間	主な遺物	主な遺構	文献・(略記号)
1	発掘 100	1972.07.31 ～08.24	弥生中期～後期：土器。古墳前期：甕。 中期：須恵器杯蓋。奈良～長岡：土師器、 須恵器、木製品、土馬、人面土器、馬の 歯・骨など。平安：土師器、須恵器、瓦。 鎌倉：瓦器。	弥生～鎌倉：北西から南東方向の 溝状流れ、杭列、奈良～長岡：祭 祀遺構。	梅川光隆『大敷遺跡発掘調査報告』 1972 六勝寺研究会
2	発掘 130	1979.07.31 ～08.20	弥生：弥生土器。	弥生：ピットおよび溝状の遺構。 中世：溝5条。	未報告 (79MK-OD1)
3	発掘 520	1980.12.04 ～1981.01.20	弥生：土器、木器、石包丁、石剣、石匙。 古墳：木器類、有孔円板、土器類。長岡 ：製塩土器、土器類。平安：土器類。鎌 倉：瓦器、瓦、土器類。近世：陶器。	弥生：川跡1条、杭跡1基。長岡 ：溝跡3条。鎌倉：建物跡5棟以 上(柱跡は約500基)、溝跡6条、 井戸跡19基、土坑4基。	未報告 (80MK-XB)
4	発掘 180	1981.08.11 ～08.19	弥生～古墳：土師器、弥生土器、自然木。 長岡：土師器、須恵器、瓦。	弥生～古墳：流路か。長岡：遺物 包含層。	磯部 勝「大敷遺跡」『昭和56年 度 京都市埋蔵文化財調査概要(発 掘調査編)』(81MK-OD2)
5	発掘 341	1983.07.11 ～10.05	縄文：縄文土器。弥生：V様式土器。古 墳：土師器、布留式土器、須恵器、管玉。 奈良：土師器、須恵器、土製品。平安： 土器類多数、瓦、人面土器・竈。鎌倉～ 室町：土器類多数、木器。	奈良～平安中期か：流路および流 路に伴う杭列(杭列は奈良時代に 設置されたと推定している)。	堀内明博・鈴木廣司「大敷遺跡」 『昭和58年度 京都市埋蔵文化財 調査概要』(83MK-OD4)
6	発掘 157.5	1985.05.07 ～06.14	弥生：弥生土器。平安：土師器、須恵器、 緑釉陶器、瓦、木製品(人形・削りかけ ・曲物)、墨書土器「浄」(須恵器)。中世： 土師器、陶器、瓦器。	時期不明：流路、それに伴う杭列、 土坑1基。	上村和直・久世康博「大敷遺跡」 『昭和60年度 京都市埋蔵文化財 調査概要』(85MK-OD5)
7	立会 1335.5	1986.12.10 ～1987.07.21	弥生：弥生土器、木器類(盤・栓)。古墳 ：土師器、須恵器。奈良：土師器、須恵 器、製塩土器、木杭。平安：土器類多数、 瓦、木器(曲物底部)。鎌倉～室町以降： 土器類多数、木製品(下駄)。	弥生：土坑、溝、自然流路。古墳 ：自然流路。奈良：自然流路、杭 列。長岡：溝。平安：土坑、溝、 自然流路。鎌倉～室町以降：柱穴、 土坑、溝(条里)。	吉崎 伸「大敷遺跡・中久世遺跡」 『昭和62年度 京都市埋蔵文化財 調査概要』(86MK-SW50)
8	発掘 485	1987.05.25 ～06.27	弥生：弥生土器、石製品、柱根。古墳： 土師器、須恵器。奈良：土師器、須恵器、 黒色土器、木製品、杭。鎌倉：土師器、 瓦器、漆、木製品。室町：土師器、瓦器、 国産陶器。	弥生後期：竪穴住居。奈良：自然 流路、護岸施設。鎌倉～室町：濠、 小溝、土坑。	鈴木廣司「大敷遺跡」『昭和62年 度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (87MK-AB)
9	発掘 172	1988.10.29 ～12.01	鎌倉：土師器、陶器、瓦器、輸入陶磁器。 室町：土師器、瓦器、陶器、金属器類 (包丁)。桃山～江戸：土師器、瓦器、陶 器、磁器、染付、金属器類(キセル)。	鎌倉～江戸前期：掘立柱建物3棟、 井戸3基、土坑、溝、柱穴。江戸 中期：柱跡(柱穴・根石・礎石)、 土坑、溝。	吉崎 伸「大敷遺跡」『昭和63年 度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (88MK-AC)
10	発掘 980	1990.01.05 ～03.23	弥生：弥生土器、勾玉。古墳：土師器、 須恵器、管玉。長岡：土師器、須恵器。 鎌倉～室町：土器類多数。江戸：土師器、 焼締陶器、施釉陶器、国産陶磁器。	弥生後期：竪穴住居4棟、方形周 溝墓、土坑、濠、溝、湿地状落込。 古墳前期：竪穴住居。古墳前期～ 中期：掘立柱建物、土壇墓、土坑、 溝、小柱穴。長岡：総柱建物(倉 庫)、掘立柱建物、柵列。鎌倉～室 町：土坑、暗渠溝。江戸：土壇墓、 土坑、暗渠溝。	鈴木廣司「長岡京左京一条三坊・ 大敷遺跡」『平成元年度 京都市 埋蔵文化財調査概要』 (89NG-UI)
11	発掘 3925	1997.12.08 ～1999.04.15	弥生：弥生土器、石剣、石鎌、鋤、柱根、 ガラス小玉。長岡：土師器、須恵器、軒 平瓦、平瓦、木製品、獣骨。平安後期： 土器類多数、曲物、折敷、漆器。近世： 土器類多数、位牌、下駄、曲物、漆器。	弥生後期：竪穴住居、方形周溝墓、 溝。長岡：掘立柱建物、井戸、柵、 溝。平安後期：井戸、溝。室町： 礎石建物、掘立柱建物、井戸、堀、 溝、土坑、河川。近世：井戸、溝、 土坑。	西大條 哲ほか「大敷遺跡」『平 成10年度 京都市埋蔵文化財調査 概要』(98MK-OG1)
12	発掘 1700	1999.07.06 ～2000.03.21	縄文後期・晩期：縄文土器。弥生後期： 弥生土器。古墳：古式土師器、土師器、 須恵器。奈良(長岡)：土師器、須恵器、 瓦。平安：土器類多数。鎌倉～室町：土 器類多数、土製品、木製品、金属製品、 石製品。桃山～江戸：土器類多数、土製 品、木製品、石製品、銭貨。	弥生後期：竪穴住居、柱穴。平安 後期：土坑。鎌倉～室町：掘立柱 建物、井戸、土坑、堀、溝。桃山 ～江戸：掘立柱建物、井戸、土坑、 堀、溝。	吉崎 伸ほか「大敷遺跡」『平成 11年度 京都市埋蔵文化財調査概 要』(99MK-OG2)
13	発掘 390	2006.11.16 ～12.08	弥生：弥生土器。平安：土師器、須恵器、 黒色土器、緑釉陶器、白磁。室町：瓦器、 陶器。	弥生：方形周溝墓。平安：土坑、 溝。室町以降：溝、建物。	『中久世遺跡・大敷遺跡』京都市 埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-19 (06MK-HN1)
14	発掘 295	2007.02.01 ～03.08	弥生：弥生土器、石鎌、石剣、砥石など、 木製品(柱根)。平安：土師器、瓦器。鎌 倉：土師器、瓦器。室町：土器類多数、 瓦類。江戸：土器類多数。	弥生後期：竪穴住居、溝、土坑、 柱穴。平安後期：柱穴。鎌倉：柱 穴。室町：建物、土坑、柱穴、溝、 堀。近世：溝。	『大敷遺跡』京都市埋蔵文化財研 究所発掘調査報告 2006-32 (06MK-RK1)

(2) 周辺の調査 (表 1、図 3)

大藪遺跡・大藪城跡内で、実施された発掘調査・広域の立会調査は 14 箇所に行われている。そのうち大藪城跡の調査は 2 件ある。1988 年に久世大藪町 291 番で宅地造成に伴って実施された調査 (図 3-9) では、掘立柱建物 3 棟、柱穴、井戸 3 基、土坑、溝などが検出されている。また、近世になっても整地を繰り返しながら、集落が継続して営まれ現代に至っていることがわかった。土師器の皿、瓦器の椀・鍋・釜、焼締陶器の甕・挿鉢、漆器椀、金属製品の包丁・銭貨などの遺物が出土している。1999 年から 2000 年にかけて実施された街路建設工事に伴って実施された調査 (図 3-12) は、東西 4 間×南北 3 間、東西 6 間×南北 5 間の 2 棟を含む掘立柱建物 5 棟、柱穴、柵、井戸、園池、溝、堀などが検出され、堀で区画された中に建物・井戸などが整然と配置されていることが明らかになった。調査地の西端で検出された南北方向の溝は、大藪城跡の西限の堀と考えられる。今回の調査で検出した区画溝と繋がる東西溝も検出されている。土師器の皿、瓦器の鍋・羽釜、漆器椀、木製品の下駄・柄杓・木球・箸・曲物、石製品の砥石、金属製品の小刀・銭貨・鎌、土製品の鏡の鋳型・羽口などの遺物が出土している。限られた範囲での調査ではあるが、大藪城跡の実態・変遷を知る上での貴重な成果である。

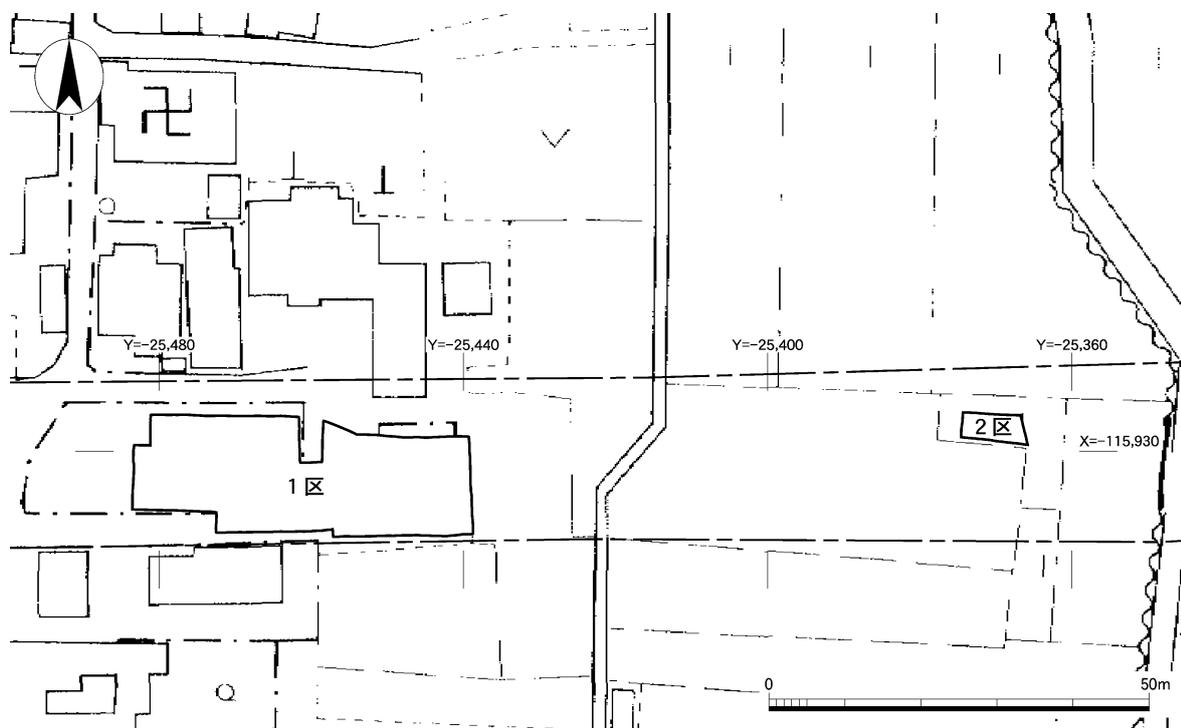


図 4 調査区配置図 (1 : 1,000)

3. 遺 構

(1) 遺構の概要 (表 2)

1区で検出した主な遺構は、室町時代後期から江戸時代初期の掘立柱建物 (SB 1～3)、柵 (SA 4)、柱穴、堀 (SD40・255)、溝 (SD151・170・341)、土坑 (SK60・342・365・370)、江戸時代後期の整地層、耕作に伴う溝 (SD29・39)、井戸 (SE160・175)、土坑 (SK 1・139・141・150・182・183)、柱穴などがある。

2区で検出した遺構には、長岡京期の土坑 (SK 6・7)、室町時代の溝 (SD 5)、水田 (SN 1・2)、畦畔 (SL 3)、江戸時代後期の土坑 (SK 4) がある。

(2) 1区の遺構

1) 基本層序 (図 5)

基本層序は、東半部は現代盛土・近代耕作土の下は近世の耕作土が堆積し、次に江戸時代後期の遺物を含む整地層が堆積している。西半部では現代盛土の下に、大きく上下に分かれる江戸時代後期の整地層が堆積している。上部の整地層 (図 5 の網掛け部分) は調査区の西半部のみでの検出である。一部版築状に、厚さ 1～2 cm の砂・粘土の互層が縞状に整地されている。また、地盤が軟弱な部分には拳大から人頭大の石を入れて、不等沈下を防いでいる箇所も確認された。下の整地層は調査区全体にみられ、その下が室町時代後期から江戸時代初期の遺構面となる地山となる。調査区の東端は下水の縦坑を造成時に攪乱・土壌改良がされたため、調査の対象からはずした。

江戸時代後期の遺構面は、上部の整地層と下部の整地層の上面の 2 面に分かれる。上層の遺構面を江戸時代後期 1 とし、下面を江戸時代後期 2 の遺構面とした。ただし、江戸時代後期 2 の遺構の大半は室町時代の遺構面で検出した。

2) 室町時代後期から江戸時代初期の遺構 (図 6～11、図版 1～4)

SB 1 (図 7、図版 2・3) 調査区の東端で検出した、南北 2 間×東西 2 間以上の東西棟の掘立

表 2 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
長岡京期		SK 6・7
室町時代後期 ～江戸時代初期	SB 1～3、SA 4、P234、SE160・175、 SD40・41・50・103・114・151・170・255・323・341、 SK60・98・99・342・365・370、P72・95・234	SN 1・2、SL 3、 SD 5
江戸時代後期	SE160・175、SD29・39・145、 SK 1・24・139・141・147・149・150・155・182・ 183・185・245・250・265・321・322・376	SK 4

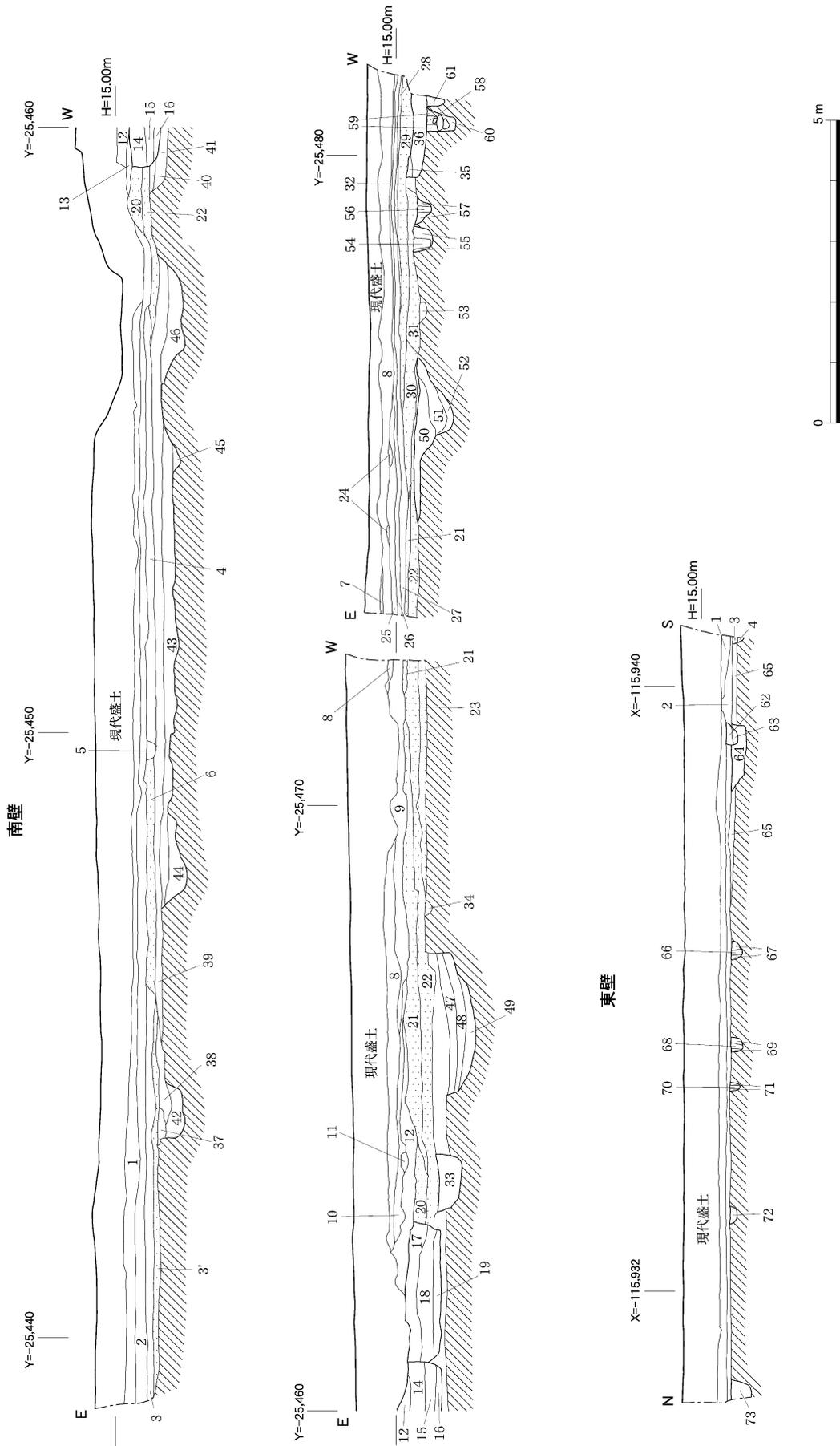


図5 1区南壁・東壁断面図 (1 : 100)

1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 やや粘質 (耕作土)
 2 10YR5/3 にぶい黄褐色・10YR3/4 暗褐色砂質土 やや粘質 混マンガン
 3 10YR5/3 にぶい黄褐色・10YR3/4 暗褐色砂質土 やや粘質
 混マンガン多量礫φ3~5cm少量
 3' 10YR5/2 灰黄褐色・10YR4/6 褐色砂質土 混マンガン多量
 4 10YR5/2 灰黄褐色・10YR4/6 褐色砂質土 粘質強い 底部に木 混マンガン炭土師 (SD39)
 5 10YR5/3 にぶい黄褐色・5YR3/3 暗赤褐色砂質土 混マンガン礫φ2~5cm少量 (SD29)
 6 10YR5/3 にぶい黄褐色・10YR4/6 褐色砂質土 混マンガン
 7 2.5Y6/2 灰黄色・2.5Y6/1 黄灰色砂質土 (ラシナナ状)
 8 2.5Y5/3 黄褐色・10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 混礫φ1~3cm中量
 9 2.5Y4/3 オリーブ褐色・5/2 暗灰黄色砂質土 やや粘質 混礫φ1~3cm少量
 10 2.5Y5/3 黄褐色・10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 やや粘質 混礫φ1~3cm少量
 11 2.5Y5/3・5/4 黄褐色砂質土 混礫φ3~5cm多量
 12 2.5Y5/2 暗灰黄色・5/3 黄褐色砂質土 混礫φ1~5cm
 13 2.5Y5/2 暗灰黄色・10YR4/4 褐色砂質土
 14 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土~粘質土 混マンガン多量
 15 2.5Y4/1 黄灰色砂質土~粘質土 混マンガン中量 (SK322)
 16 5Y4/1 灰色粘質土
 17 2.5Y4/3~4/4 オリーブ褐色砂質土 混礫φ0.5~3cm中量
 18 2.5Y5/3~5/4 黄褐色砂質土 混礫φ~1cm少量
 19 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 混炭少量
 20 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 混7.5YR4/3 褐色マンガン多量
 21 2.5Y4/3 オリーブ褐色・10YR4/4 褐色砂質土 混炭少量
 22 2.5Y5/2 暗灰黄色・10YR4/4 褐色砂質土 礫φ3~5cm・炭少量
 23 2.5Y5/3 黄褐色・10YR4/2 灰黄褐色砂質土
 24 2.5Y5/4 黄褐色~4/4 オリーブ褐色砂質土 混礫φ3~8cm多量
 25 2.5Y5/4 黄褐色~4/4 オリーブ褐色砂質土 混礫φ1~2cm少量
 26 2.5Y5/4 黄褐色~4/4 オリーブ褐色砂質土 25よりオリーブ褐色多
 27 2.5Y5/4・5/3 黄褐色~4/4 オリーブ褐色砂質土 混礫φ0.5~5cm少量
 28 2.5Y5/4 黄褐色~4/4 オリーブ褐色砂質土 混礫φ0.5~1cm少量
 29 2.5Y5/3 黄褐色・4/3 オリーブ褐色砂質土
 30 2.5Y5/4 黄褐色・10YR4/4 褐色砂質土 混礫φ1~5cm少量
 31 10YR4/4 褐色・2.5Y5/4 黄褐色砂質土 混炭少量
 32 2.5Y4/6 オリーブ褐色・5/3 黄褐色・6/2 灰黄色砂質土
 33 5Y4/1 灰色~3/1 オリーブ黒色粘質土
 34 2.5Y5/2 暗灰黄色・10YR4/4 褐色砂質土
 35 2.5Y5/3 黄褐色・6/2 灰黄色砂質土

36 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土~粘質土
 37 10YR5/3~4/3 にぶい黄褐色・3/4 暗褐色砂質土 マンガン多 (SD40)
 38 10YR5/2 灰黄褐色・5/6 黄褐色砂質土
 39 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 粘質強い 混礫φ1~2cm
 40 2.5Y5/2 暗灰黄色~5/3 黄褐色砂質土 (SD255)
 41 2.5Y5/2~4/2 暗灰黄色砂質土
 42 2.5Y5/1 黄灰色~5/2 暗灰黄色シルト~粘質土 7.5YR4/6 褐色マンガン中量混 (SD102)
 43 2.5Y5/2~4/2 暗灰黄色砂質土 粘質強い 混礫φ2~3cm少量 (SD102)
 44 2.5Y5/1 黄灰色~5/2 暗灰黄色シルト~粘質土 7.5YR4/6 褐色マンガン中量混 (SD50)
 45 2.5Y5/1 黄灰色~5/2 暗灰黄色シルト~粘質土 7.5YR4/6 褐色マンガン中量混 (SD101)
 46 2.5Y4/1 灰色シルト~暗灰黄色シルト~粘質土 7.5YR4/6 褐色マンガン中量混 (SD114)
 47 7.5Y4/1 灰色粘質土 混炭少量
 48 7.5Y4/1 灰色粘質土 混炭少量 (SD323)
 49 7.5Y4/1 灰色~4/2 灰オリーブ色粘質土
 50 10YR4/3 にぶい黄褐色・5/2 灰黄褐色砂質土 混礫φ1~3cm少量
 51 10YR5/2 灰黄褐色・5/6 黄褐色砂質土 混礫φ3~5cm中量
 52 5Y4/2 灰オリーブ色粘質土
 53 2.5Y5/2 暗灰黄色~5/3 黄褐色砂質土
 54 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 混炭少量
 55 2.5Y5/3 黄褐色~4/3 オリーブ褐色砂質土
 56 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 混炭少量
 57 2.5Y5/3 黄褐色~4/3 オリーブ褐色砂質土
 58 2.5Y4/2 暗灰黄色~4/1 黄灰色砂質土 やや粘質
 59 2.5Y4/2 暗灰黄色~4/1 黄灰色・10YR4/4 褐色砂質土
 60 10YR3/4 暗褐色粘質土
 61 2.5Y4/2 暗灰黄色~4/1 黄灰色砂質土 やや粘質
 62 10YR5/3 にぶい黄褐色・4/4 褐色砂質土 混マンガン
 63 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
 64 10YR5/2 灰黄褐色・4/4 褐色砂質土 混マンガン
 65 10YR5/3 にぶい黄褐色・4/6 褐色砂質土 混マンガン
 66 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 やや粘質
 67 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 やや粘質
 68 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 やや粘質
 69 10YR5/2 灰黄褐色・4/4 褐色砂質土 やや粘質
 70 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 やや粘質
 71 10YR5/2 灰黄褐色・4/4 褐色砂質土 やや粘質
 72 10YR5/2 灰黄褐色砂質土~粘質土
 73 10YR4/3 にぶい黄褐色・4/4 褐色砂質土 混マンガン

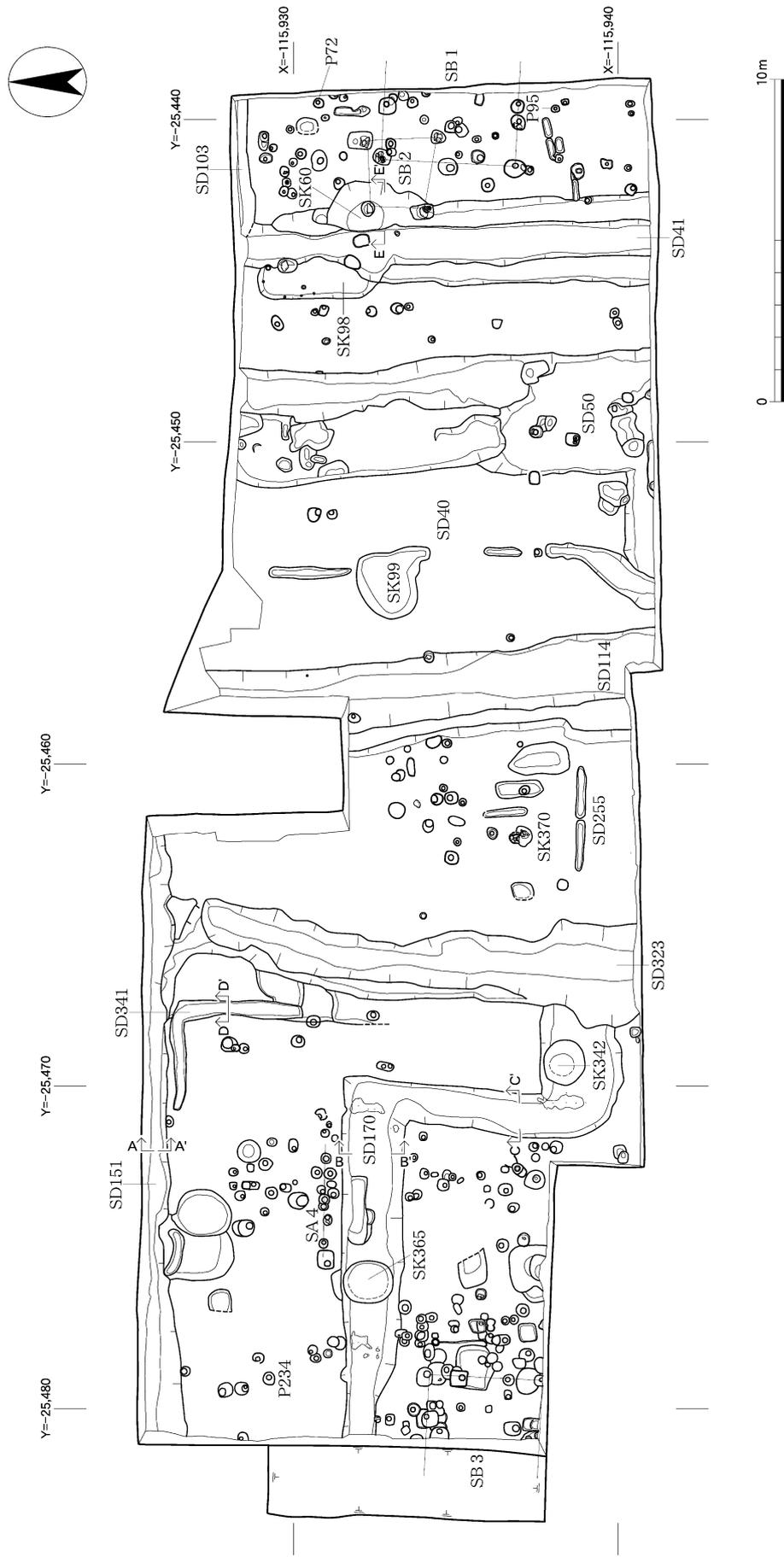


図6 1区遺構平面図1 [室町時代後期から江戸時代初期] (1:200)

柱建物である。北西隅の柱穴（P77）では、柱根と根固めの石が認められた。南北の柱間距離は 2.1 m、東西の柱間距離は 1.8 m である。

SB 2（図 8、図版 2・3）SB 1 の北西隅と重なって検出した、南北 1 間×東西 1 間の掘立柱建物である。西側の柱間距離（1.8 m）より東側の柱間距離（2.4 m）が長くて平面が台形となる。東西の柱間距離はどちらも 2.1 m である。すべての柱穴に根石が据えられている。南西隅の柱穴（P121）には、根石の上に高さ調整するための礎板が 2 枚敷かれ、その上に長さ 50 cm、幅 18 cm の柱が据え付けられている。檜のような特殊な建物と思われる。

SB 3（図 9）調査区の南西隅で検出した、南北 3 間×東西 1 間以上の掘立柱建物である。根石を 2 段に重ねた柱穴（P316）がある。南北の柱間距離は、北から 1.0 m、1.4 m、1.0 m、東西の柱間距離は 1.3 m である。

SA 4（図 9）調査区の西辺で検出した、2 間分の東西方向の柱列である。柱間距離は 1.3 m である。SD170 の北肩と平行に、約 0.6 m 北に位置する。

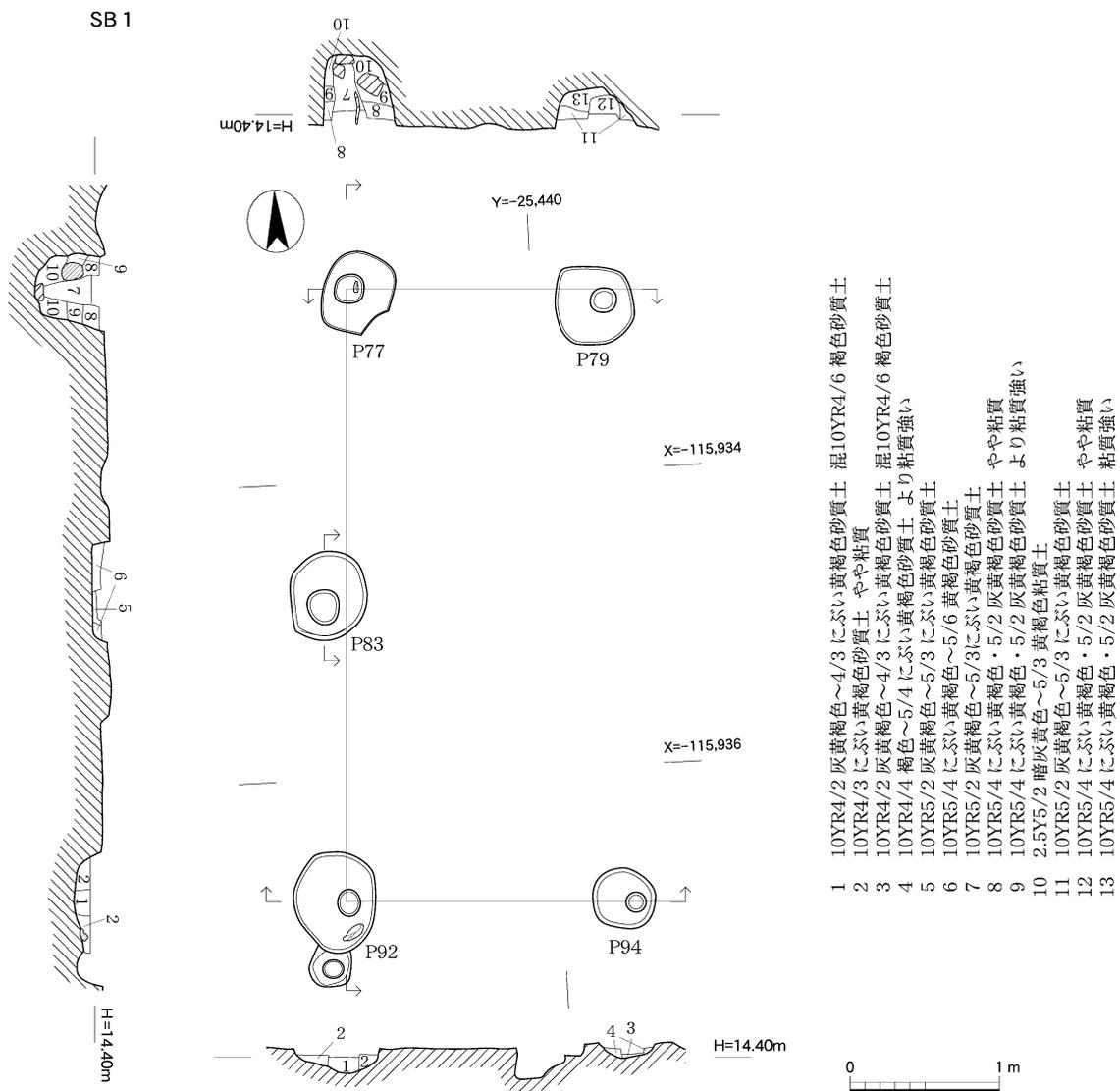


図 7 1 区 SB 1 実測図 (1 : 50)

SB 2

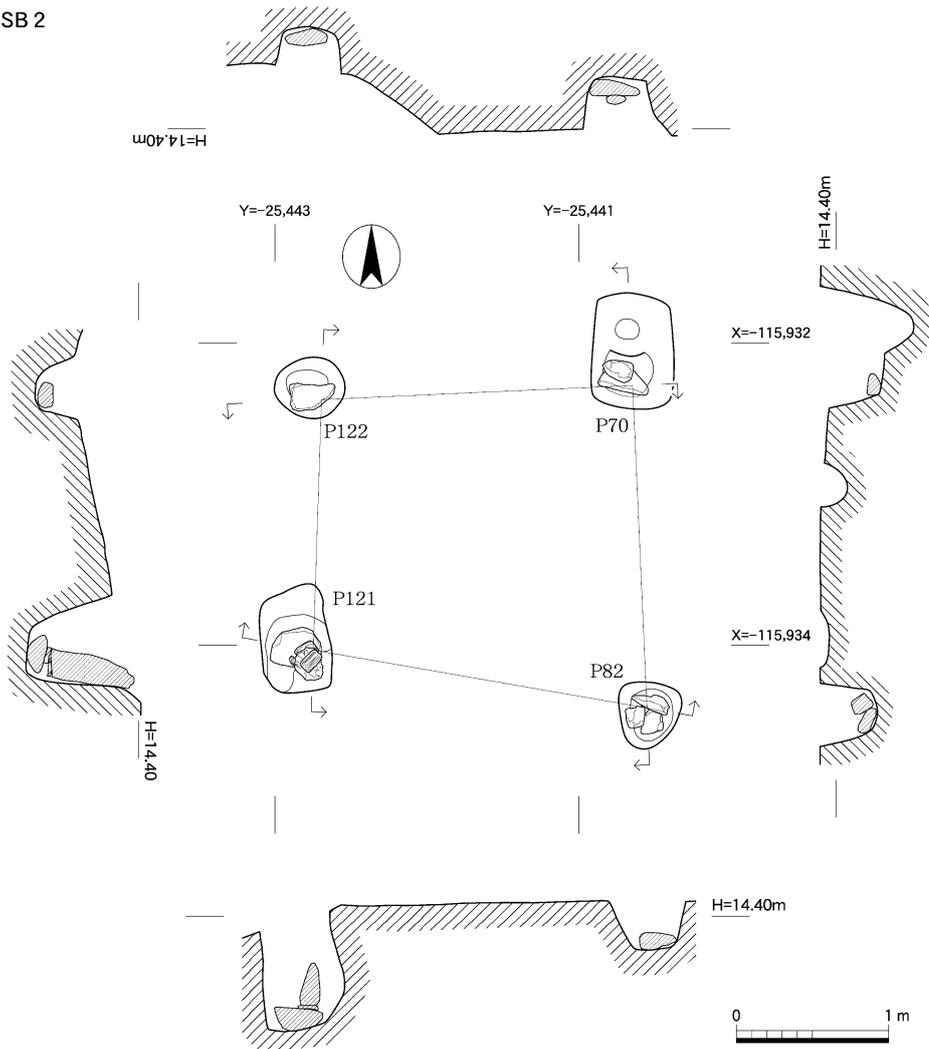


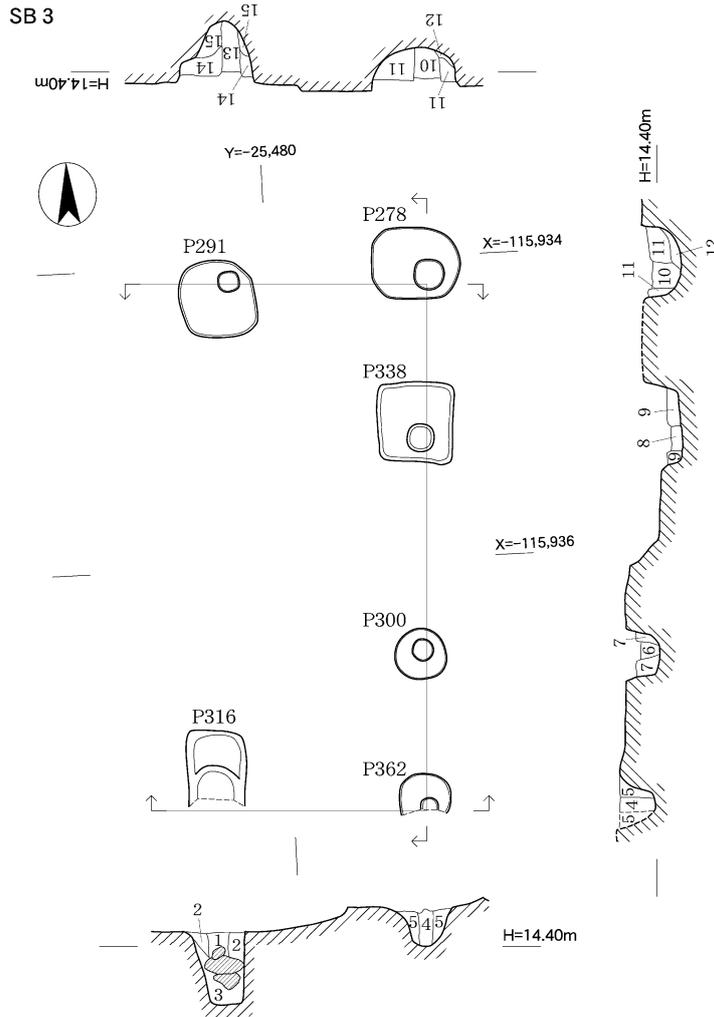
図8 1区SB 2実測図(1:50)

P234 (図6、図版3) 調査区北西隅で検出した、径約0.35mの円形の柱穴である。一辺約0.1mの方形の柱根が残る。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、土師質土器の小壺が出土している。

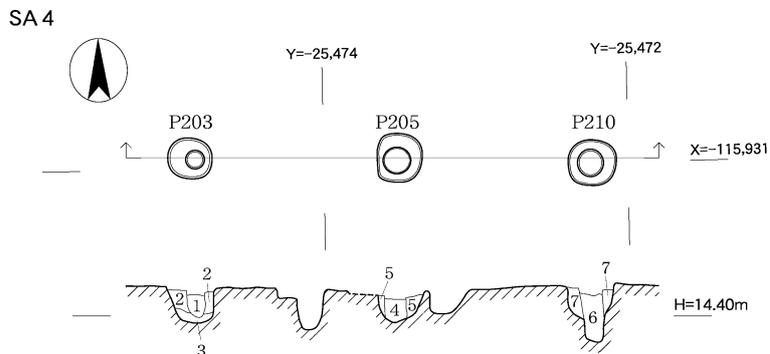
SD40 (図5・6) 調査区の東半で検出した、底部が平坦な浅い堀状の南北方向の溝である。幅約16m、深さ0.2~0.3mで、埋土はオリーブ褐色砂質土にマンガン粒が混じっている。江戸時代まで溝として機能していた可能性があり、江戸時代後期の遺物を含む整地層によって埋められている。したがって、SD40で取り上げた遺物の大半は整地層出土遺物として取り扱った。土師器の皿、輸入青磁の椀、瓦などが出土している。

SD41 (図5・6) SD40の東肩沿いの下部で検出した、南北方向の溝である。幅0.9~1.1m、深さ0.3~0.5mである。両肩はほぼ垂直におち、埋土は暗灰黄色シルトで、土師器の皿、土師質土器の小壺、施釉陶器の椀・皿などが出土している。

SD50 (図5・6) SD40の底部のほぼ中央で検出した南北方向の溝で、南端で西に流れを変える。北半で底部は2段になる。幅3.2~3.6m、深さは北半の西部は0.2~0.3m、東部が0.45~0.55mである。埋土は黄灰色シルトで、土師器の皿、輸入青磁の椀、施釉陶器の椀・皿、焼締陶器の甕、



- | | |
|---|---------------------------------|
| 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色～4/1 黄灰色砂質土 やや粘質 | 8 10YR4/6 褐色～4/1 褐色砂質土 |
| 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色～4/1 黄灰色砂質土+10YR4/4 褐色砂質土 | 9 10YR4/6 褐色～4/1 褐色粘質土 |
| 3 10YR3/4 暗褐色粘質土 | 10 10YR5/2～4/2 灰黄褐色砂質土 |
| 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 炭少量 | 11 2.5Y5/2 暗灰黄色～5/3 黄褐色粘質土 やや粘質 |
| 5 2.5Y5/3 黄褐色～4/3 オリーブ褐色砂質土 | 12 2.5Y4/6 オリーブ褐色～5/1 黄灰色粘質土 |
| 6 10YR5/2 灰黄褐色～5/3 にぶい黄褐色砂質土 炭少量 | 13 10YR5/2～4/2 灰黄褐色砂質土 |
| 7 2.5Y5/2 暗灰黄色～5/3 黄褐色砂質土 やや粘質 | 14 2.5Y5/2 暗灰黄色～5/3 黄褐色砂質土 やや粘質 |
| | 15 2.5Y4/6 オリーブ褐色～5/1 黄灰色粘質土 |



- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 | 5 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土+10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 |
| 2 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土+10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 | 6 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土+2.5Y5/4 黄褐色砂質土 |
| 3 2.5Y5/1 黄灰色砂質土 やや粘質 | 7 10YR4/4 褐色粘質土+10YR5/2 灰黄褐色砂質土 |
| 4 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 | |



図9 1区SB 3・SA 4実測図 (1:50)

木製品の椀、柿経と思われる薄板に墨書したものの、鉄滓などが出土している。

SD103 (図6) 調査区の北東隅で検出した東西方向の溝である。南肩のみの検出で幅は不明であるが0.5 m以上、深さは0.3 mである。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、土師器の皿などが出土している。

SD114 (図5・6) SD40の西肩沿いの下部で検出した、若干西にふれるが、ほぼ南北方向の溝である。幅1.9～2.1 m、深さ0.3～0.5 mである。埋土は黄灰色シルトで、土師器の皿、瓦器の鍋、施釉陶器の椀、焼締陶器の甕・播鉢、鉄滓などが出土している。

SD40・41・50・114は、同一の堀として機能していた時期があったと思われる。

SD255 (図5・6) 調査区の中央部で検出した南北方向の堀状の溝である。SD40より約0.5 m間をおいた西側に位置し、北部でSD151と合流する。合流部は、馬の背状になり浅くなる。幅7.7～8.6 m、深さ0.25～0.35 mである。埋土は暗灰黄色砂質土で、土師器の皿、土師質土器の焙烙、瓦器の壺・鍋・羽釜・火舎・香炉、施釉陶器の椀・皿、焼締陶器の甕・播鉢、木製品の椀・箸・木球・曲物・柄杓・下駄、金属製品の煙管、土製品の羽口、鉄滓、弥生時代の石器(石刀)などが出土している。

SD323 (図5・6) SD255の西肩沿いの下部で検出した、南北方向の溝である。北端はSD151との合流部で途切れる。幅2.1～3.1 m、深さ0.3～0.5 mである。埋土は3層に分かれ、上層より灰色シルト、灰色粘質土、灰オリーブ色粘質土の順に堆積している。土師器の皿、土師質土器の焙烙、瓦器の鍋・火舎、施釉陶器の椀、焼締陶器の甕・播鉢、木製品の漆器椀・下駄、鉄滓などが出土している。

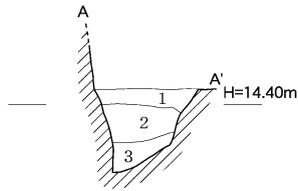
SD255と、同一の堀として機能していた時期があったと思われる。

SD151 (図10) 調査区の西半部北端で検出した、東西方向の溝である。南肩のみの検出で幅は不明であるが1.2 m以上、深さは0.3～0.6 mである。埋土は3層に分かれ、上よりオリーブ褐色砂質土、暗灰黄色砂質土、灰色砂質土の順に堆積している。土師器の皿・羽釜、瓦器の鍋・羽釜、施釉陶器の椀、焼締陶器の壺・甕・播鉢、木製品の曲物、金属製品の小刀、石製品の硯、鉄滓などが出土している。

SD170 (図10) 調査区の西半で検出した溝で、調査区の西端から東へ約11.2 mで東西方向の流れを直角に南に変え、屈曲点より約6.1 mで再び東に方向を転換してSD255に合流する。幅1.5～2.5 m、深さ0.2～0.5 mである。埋土は基本的に3層に分かれ、上からオリーブ褐色砂質土、褐灰色砂質土、灰色粘質土の順に堆積している。溝内では、数箇所土師器の皿の完形品を含め多くの遺物が密集して出土している。主な出土遺物には、土師器の皿、土師質土器の焙烙、瓦器の椀・壺・鍋・羽釜、施釉陶器の椀・皿、焼締陶器の甕・播鉢、木製品の折敷、土製品の羽口などがある。屋敷地を区画する溝と考えられる。

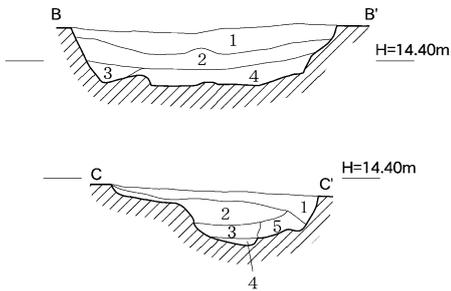
SD341 (図10) SD151とSD255の合流部の角に沿って検出した、鉤形の溝である。掘立柱建物や柱穴群が立地する微高地から、溝(堀)に移る傾斜変換点に掘られている。幅0.3～0.6 m、深さ0.2～0.4 mである。埋土は灰色粘質土で、鉄滓が出土している。

SD151



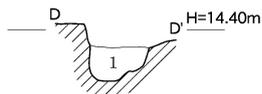
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色・10YR4/6 褐色砂質土
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色～5/3 黄褐色砂質土
- 3 5Y5/1 灰色～5/2 灰オリーブ色砂質土 やや粘質

SD170



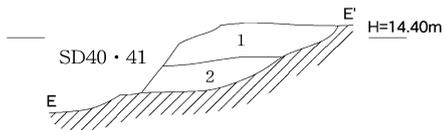
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色・10YR4/6 褐色砂質土
- 2 10YR5/1 褐灰色～5/2 灰黄褐色砂質土 やや粘質 混マンガン
- 3 2.5Y5/1 黄灰色～5/2 暗灰黄色砂質～粘質土
- 4 5Y5/1 灰色粘質土
- 5 2.5Y5/1～4/1 黄灰色粘質土

SD341



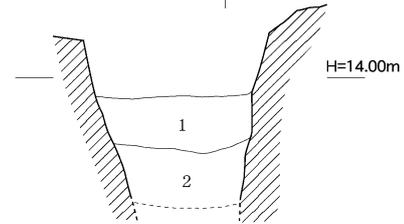
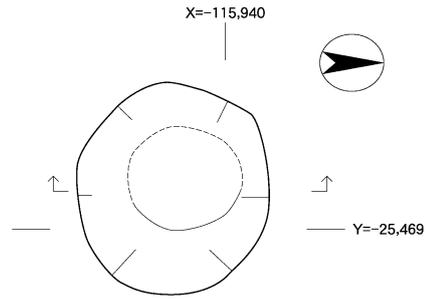
- 1 10Y4/1 灰色粘質土

SK60



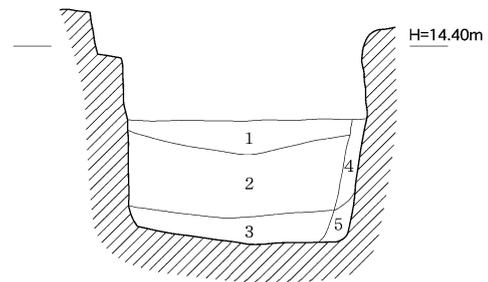
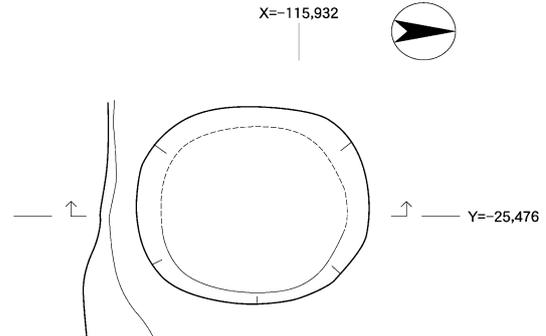
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色～3/2 黒褐色砂質土
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色～4/3 オリーブ褐色砂質土 やや粘質

SK342



- 1 7.5YR5/1～4/1 褐灰色砂質土～シルト
- 2 10YR4/1 褐灰色～3/1 黒褐色粘質土

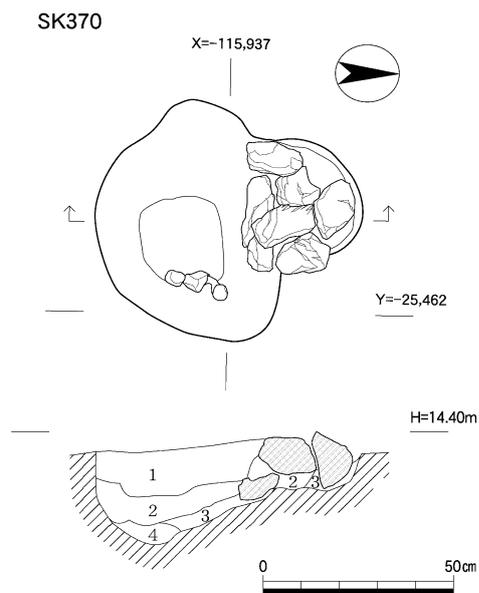
SK365



- 1 10Y4/1 灰色～4/2 オリーブ灰色砂質土・シルト
- 2 10Y5/1～4/1 灰色シルト～粘質土
- 3 10Y3/1～3/2 オリーブ黒色粘質土
- 4 5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト～粘質土
- 5 5GY4/1～3/1 暗オリーブ灰色砂質土～細砂



図 10 1区 SD151・170・341、SK60 断面図、SK342・365 実測図 (1 : 50)



- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 やや粘質 混炭多量
- 2 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 粘質 混焼土
- 3 7.5Y3/2 オリーブ黒色砂質土 混焼土
- 4 7.5Y3/2 オリーブ黒色砂質土 混細砂炭多量

図 11 1区SK370 実測図 (1:20)

SK60 (図 10) 西半部をSD40・41が掘られているので、全体の形状・規模は不明である。残存長は3.2m、深さは0.5mである。埋土は上層がにぶい黄褐色砂質土、下層は暗灰黄色砂質土で、土師器の皿、瓦器の羽釜、焼締陶器の甕などが出土している。

SK98 (図 6、図版 3) 調査区の北東部、SD40の底部で、検出した矩形の土坑である。東側は、SD41と繋がる。北肩と西肩の北半に径0.05mの丸杭の痕跡が残る。長さ3.75m、幅1.3m、深さ0.3mである。埋土はオリーブ褐色砂質土で、石製品の砥石が出土している。SD41に併設された施設の可能性が考えられる。

SK99 (図 6) 調査区の東半部、SD40の底部で検出した、不定形な土坑である。長さ2.5m、幅2.25m、深さ0.25mである。埋土は上層が暗灰黄色砂質土、

下層が黄褐色粘質土で、土師器の皿、瓦器の羽釜が出土している。

SK342 (図 10) SD255との合流点手前のSD170の底部で検出した、楕円形の土坑である。長軸1.4m、短軸1.2m、深さは約1.5mまで確認した。埋土は上層が褐灰色砂質土、下層は褐灰色粘質土で、土師器の皿、瓦器の椀、焼締陶器の甕、板状の木製品などが出土している。

SK365 (図 10) 調査区の西部のSD170の底部で検出した、楕円形の土坑である。長軸1.5m、短軸1.25m、深さは1.5mである。埋土は灰色シルトが主体で、土師器の甕、焼締陶器の甕・播鉢などが出土している。

SK370 (図 11) 調査区の中央部のSD255の底部で検出した、ダルマ形の土坑である。長さ0.7m、北側の小円部の幅は0.3m、南側の大円部の幅は0.65mである。小円部は深さ0.1mと浅く径0.1~0.15mの礫が積み上げられている。大円部の深さは0.25mで、埋土はオリーブ褐色砂質土・黄灰色砂質土を主体とし、焼土塊・炭が多く含まれている。土師器の皿、土師質土器の小壺などが出土している。鑄造に関連する遺構と思われる。

3) 江戸時代後期2の遺構 (図 12~14、図版 5~7)

SE160 (図 13) 調査区の西部で検出した、長軸2.4m、短軸2.1mの楕円形の掘形をもつ、内径約0.9m、深さ1.8m以上の円形石組井戸である。石組は、長さ0.15~0.35m、幅0.05~0.15m大の短冊状の河原石を小口を内に向けて積み上げている。下部になると、大きな石の側面を内側にして据えた箇所も認められる。石組は検出面から約0.9mで検出しており、上部は廃棄時に破壊されたと思われる。図 13の1~8層は廃棄時の堆積層、9・10層は掘形の埋土で、石組内の埋土は暗灰黄色砂質土である。土師器の皿、土師質土器の焙烙、施釉陶器の椀、焼締陶器の甕・

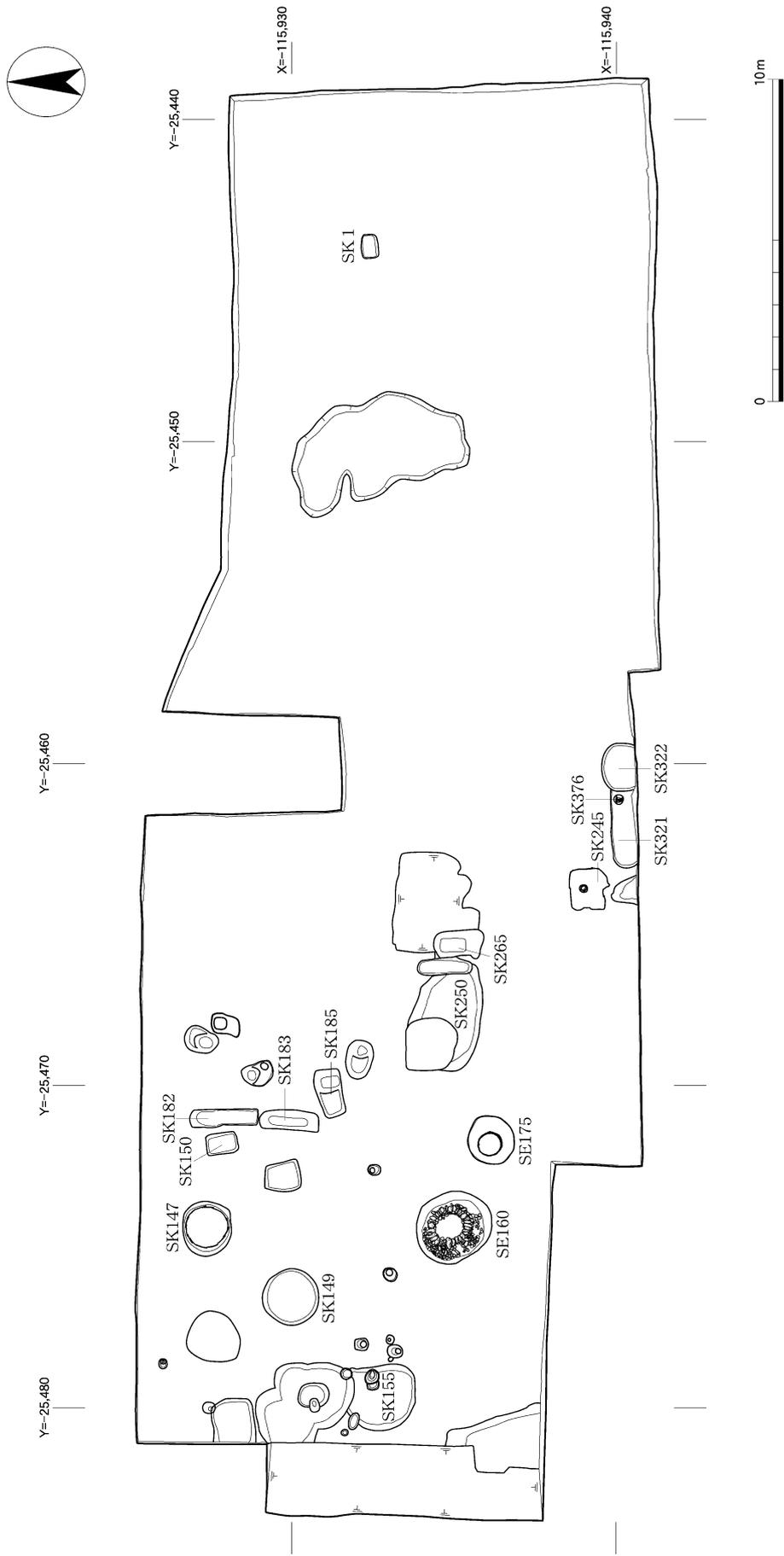
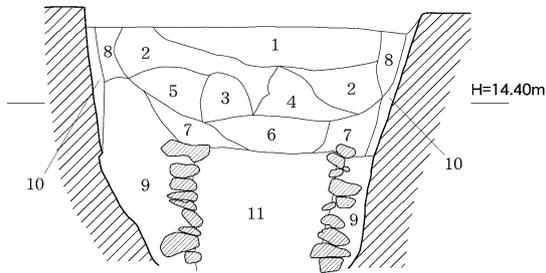
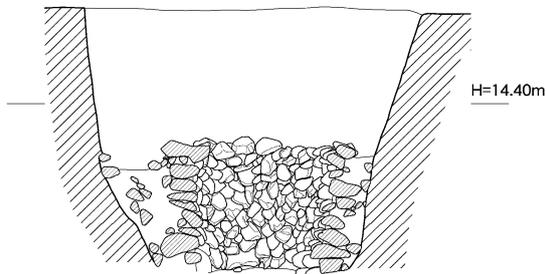
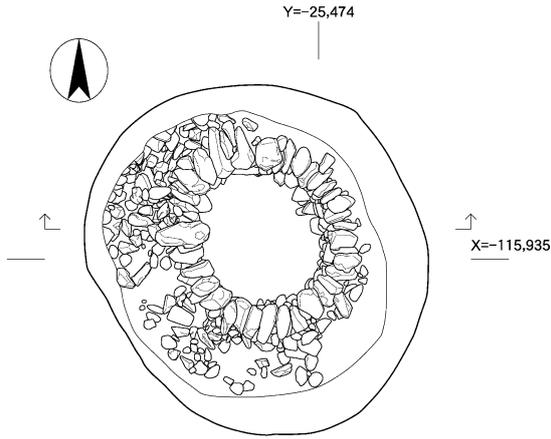


図 12 1区遺構平面図2 [江戸時代後期2] (1:200)

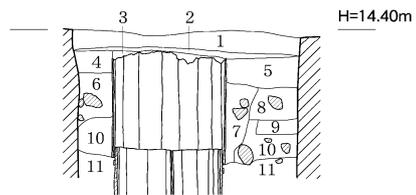
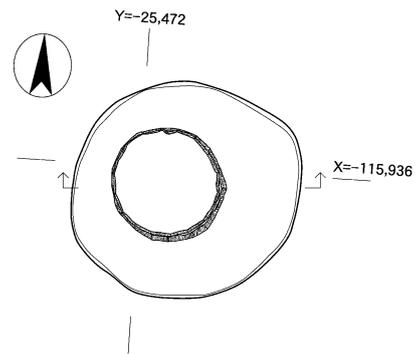
SE160



- 1 10Y4/1 灰色砂質土～粘質土 混礫φ5～7cm少量
- 2 10Y4/2 オリーブ灰色・7.5Y5/3 灰オリーブ色粘質土 混礫φ3～5cm少量
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色・7.5YR5/8 明褐色砂質土 混マンガン多量
- 4 10Y4/2 オリーブ灰色・7.5Y5/3 灰オリーブ色砂質土 混礫φ10～15cm
- 5 10Y4/2 オリーブ灰色・7.5Y5/3 灰オリーブ色砂質土 混礫φ10～15cm少量
- 6 10Y4/1 灰色～3/1 オリーブ黒色粘質土 混粗砂
- 7 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 混粗砂礫φ5～20cm
- 8 2.5Y5/3 黄褐色砂質土 混マンガン多量粗砂礫φ5～10cm
- 9 2.5Y5/3 黄褐色砂質土 混粗砂礫φ5～15cm
- 10 10Y5/1 灰色～5/2 オリーブ灰色シルト～粘土
- 11 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 混粗砂礫φ5～15cm

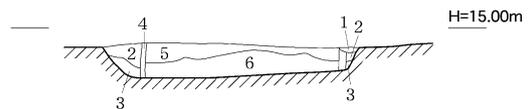
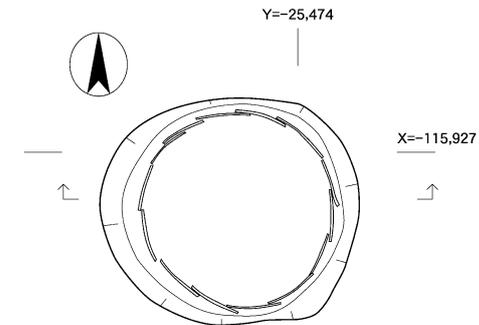


SE175



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質～粘質土
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質～粘質土 1より粘質強い
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色・4/1 褐灰色シルト～粘土
- 4 10YR4/4・4/6 褐色粘質土 礫φ5～7cm
- 5 10Y4/1 灰色～3/1 オリーブ黒色砂質土 シルトに近い
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色～4/3 オリーブ褐色砂質土 極細砂多
- 7 10Y4/1 灰色砂質土～シルト やや粘質 混礫φ10～20cm
- 8 10Y4/1 灰色～4/2 オリーブ灰色砂質土～シルト やや粘質 混礫φ10～30cm多
- 9 10Y4/2 オリーブ灰色シルト～砂質土
- 10 2.5GY4/1～3/1 暗オリーブ灰色砂質土 細砂多 混礫φ10～30cm
- 11 2.5GY4/1～3/1 暗オリーブ灰色粘質土 混礫φ5cm

SK147



- 1 10YR5/6 黄褐色～5/3 にぶい黄褐色砂質土
- 2 10YR4/4 褐色砂質土 やや粘質
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色～5/2 灰黄褐色粘質土
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 5 2.5Y5/3 黄褐色砂質土+2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土+10YR4/6 褐色砂質土

図13 1区 SE160・175、SK147 実測図 (1:50)

播鉢、染付磁器の椀・皿、石製品の砥石、金属製品の銭貨（天聖元寶・元祐通寶）などが出土している。

SE175（図13） SE160の南東約1.0 mで検出した、径約1.5 mの円形の掘形をもつ井戸である。円形の桶を上下2段に積んで井戸枠としている。上段の桶は径0.74 m、高さ0.7 mで、18枚の樽板が用いられている。下段の桶は径0.7 m、高さは0.35 m以上で、上段の桶と7～10 cm重なって入る。樽板は18枚である。深さは1.1 m以上で、枠内の埋土は上からにぶい黄褐色砂質土、褐灰色シルトの順に堆積している。土師器の皿、施釉陶器の椀・鉢、焼締陶器の播鉢、染付磁器の椀・瓦などが出土している。

SK 1（図14） 調査区の東部で検出した、矩形の土坑である。長さ0.75、幅0.5 m、深さ0.3 mである。埋土は2層に分かれ、上層は暗オリーブ色シルト、下層は暗緑灰色粘質土である。土師器の皿、焼締陶器の播鉢などが出土している。

SK147（図13） 調査区の北西隅で検出した、径1.5 m、深さ0.25 mの円形の土坑である。土坑内には箍が検出されるなど、径1.35 mの桶を据え付けた痕跡が認められた。桶内の埋土は2層に分かれ、上層は黄褐色砂質土、下層は暗灰黄色粘質土である。土師器の皿、焼締陶器の甕、染付磁器の椀などが出土している。

SK150（図14） 調査区の西部で検出した、矩形の土坑である。長さ0.95 m、幅0.55 m、深さ0.35 mである。埋土は上から黄褐色細砂、褐色砂質土、褐灰色粘質土、暗灰黄色粘質土、黄灰色粘質土の順に堆積している。土師器の皿、土師質土器の焙烙、施釉陶器の椀、焼締陶器の甕・播鉢、染付磁器の椀などが出土している。

SK155（図12） 調査区の西端で検出した、不整円形の土坑で、北側を他の土坑に切られている。東西幅2.0 m、深さ0.1 mである。埋土は褐色粘質土で、土師器の皿、施釉陶器の椀、金属製品の銭貨（元豊通寶）、鉄滓が出土している。

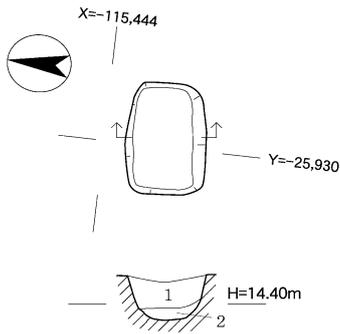
SK182（図14） 調査区の西部で検出した、南北に長い短冊形の土坑である。長さ2.1 m、幅0.5 m、深さ0.55 mである。埋土は上からオリーブ褐色粘質土、灰色粘質土、暗緑灰色粘土の順に堆積している。施釉陶器の椀、焼締陶器の播鉢、木製品の下駄、土製品の鈴などが出土している。

SK183（図14） SK182のすぐ南で検出した、南北に長い矩形の土坑である。長さ1.85 m、幅0.6 m、深さ0.75 mである。埋土は灰色粘質土が主体で、土師器の皿、土師質土器の焙烙、施釉陶器の椀、染付磁器の椀などが出土している。

SK185（図12） SK183の南西隅に接して検出した、東西に長い矩形の土坑である。長さ1.5 m、幅0.8 mである。底部は東西で2段になり、深さは西が0.25 m、東が0.5 mである。埋土は灰色粘質土が主体で、土師器の皿、施釉陶器の椀、染付磁器の椀・仏飯器、土製品の人形が出土している。

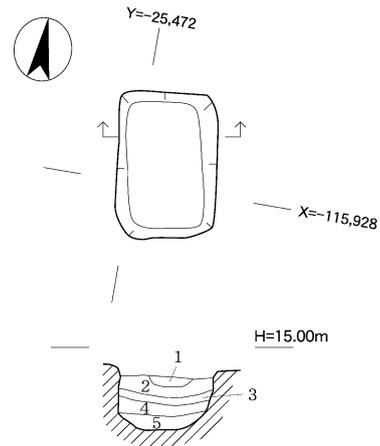
SK245（図12） 調査区の中央部の南壁付近で検出した、不整形の土坑である。東肩に2箇所、南肩に1箇所径約0.05 mの丸杭が打ち込まれている。底部の中央やや北に寄った所に径0.25 mの円形の土坑が穿たれ、その中に底を抜いた桶が据え付けられている。桶は上下2段に竹の箍で結び止めた径15 cm、高さ12.5 cmの小型で、9枚の樽板からなり、その内の1枚には縦1.5 cm、

SK 1



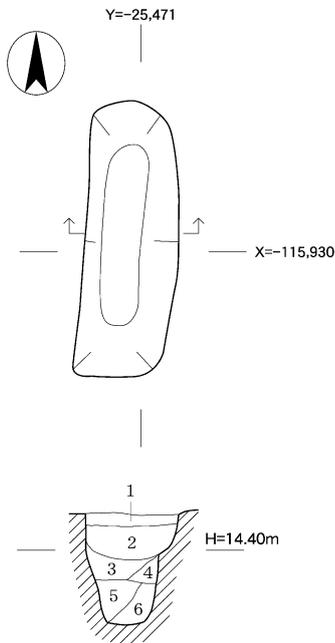
- 1 5GY3/1 暗オリーブ色シルト～砂質土
- 2 5GY4/1 暗緑灰色粘質土

SK150



- 1 10YR5/6 黄褐色・6/3 にぶい黄橙色細砂互層
- 2 10YR4/6 褐色砂質土 10YR5/6 黄褐色細砂混
- 3 10YR5/1 褐灰色・4/6 褐色粘質土
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色・3/3 暗オリーブ褐色粘質土
- 5 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 粘質強い
10YR5/6黄褐色シルト混

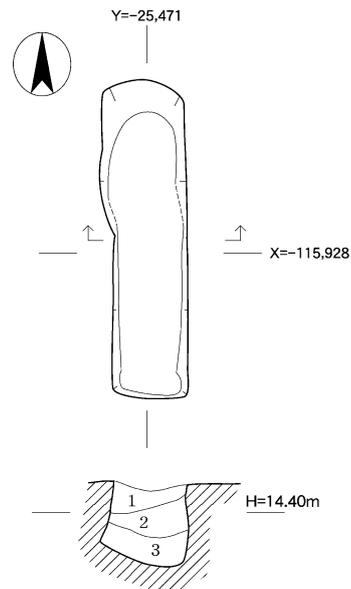
SK183



- 1 5Y4/1 灰色・2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質土 微砂混
- 2 10Y4/1 灰色粘質土 微砂混
- 3 10Y4/1 灰色粘質土 微砂混 2より粘質強い
- 4 10Y4/1 灰色シルト～粘土
- 5 10GY3/1 暗緑灰色粘土～シルト
- 6 10GY4/1 暗緑灰色粘土



SK182



- 1 5Y4/1 灰色・2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質土 微砂混
- 2 10Y4/1 灰色粘質土
- 3 10GY3/1 暗緑灰色粘土～シルト

図 14 1区 SK 1・150・182・183 実測図 (1:50)

横 2.5 cm の矩形の孔が穿たれている。埋土は灰色粘質土が主体で、土師器の皿、土師質土器の焙烙、焼締陶器の甕・挿鉢、染付磁器の椀などが出土している。

SK250 (図 12) 調査区の中央部で検出した、東西に長い楕円形の土坑である。長軸 3.4 m、短軸 2.05 m、深さ 0.25 m である。埋土は 2 層に分かれ、上層は灰色砂質土、下層はオリーブ黒色砂質土である。土師器の皿、土師質土器の鉢・焙烙、施釉陶器の椀、焼締陶器の挿鉢、染付磁器

の椀などが出土している。

SK265(図 12) SK250 の東で検出した、南北に長い矩形の土坑である。長さ 1.55 m、幅 0.8 m、深さ 0.65 mである。埋土は上から黒色砂質土、灰色シルト、オリーブ黒色粘質土の順に堆積している。土師器の皿、施釉陶器の椀、焼締陶器の播鉢、染付磁器の椀、木製品の木札などが出土している。

SK321 (図 12) SK245 の南東で検出された土坑である。南側が調査区外にのびるため、全体の形状・規模は不明である。東西幅は 2.35 m、深さ 0.6 mである。埋土は上からオリーブ褐色砂質土、黄褐色砂質土、黄灰色砂質土の順に堆積している。土師質土器の焙烙、施釉陶器の鉢、焼締陶器の甕、染付磁器の壺、木製品の漆器の皿、石製品の硯などが出土している。SK322 を切っている。

SK322 (図 12) SK321 の西側で検出した土坑である。南側が調査区外にのびるため、全体の形状・規模は不明である。東西幅は 1.5 m、深さ 0.5 mである。埋土は上から暗灰黄色砂質土、黄灰色砂質土、灰色粘質土の順に堆積している。土師器の皿、土師質土器の焙烙、施釉陶器の皿などが出土している。

SK376 (図 12) SK322 の底部の北東隅で検出した、径 0.3 m、深さ 0.2 mの円形の土坑である。埋土は灰色粘質土で、土師器の皿、木製品の下駄・折敷が出土している。

4) 江戸時代後期 1 の遺構 (図 15・16、図版 5～7)

小溝群 (図 15) 西半部より一段下がった調査区の東半部で検出した、南北方向の小溝群で、耕作に関連するものと思われる。幅 0.15～0.4 m、深さ 0.05～0.1 mである。

SD29 (図 15) 調査区の東部で検出した、南北方向の溝である。幅 0.4～0.5 m、深さ 0.15～0.25 mである。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、底部よりやや上に割竹を敷き並べており、耕作用の暗渠であろう。

SD39(図 15) 調査区の東部の南壁沿いで検出した、若干東で北にふれるが東西方向の溝である。幅 0.15～0.2 m、深さ 0.2 mである。埋土は灰黄褐色砂質土で、土師器の皿が出土している。耕作用の暗渠であろう。SD29 を切っている。

SD145 (図 16) 調査区の中央部で検出した、南北方向の溝である。溝内に径 5～15 cmの河原石を乱雑に詰め込んでいる。幅 0.4～0.6 m、深さ約 0.3 mである。土師器の皿、施釉陶器の椀、焼締陶器の甕、瓦などが出土している。土蔵などの建物の基礎と考えられる。

SK139(図 16) 調査区の中央部で検出した、径約 1.7 mの円形の土坑である。下部に径 1.25 m、高さ 0.3 mのたらい状の桶を据え、桶の側板の上に約 0.4 mの高さの漆喰の枠を取り付けている。枠内が約 0.15 m埋まった段階で、漆喰で新たに底を貼り直している。その際、漆喰底のすぐ下に幅約 0.15 mの板材を敷いている。桶には樽板に 29 枚、底板として 7 枚の板材が用いられている。枠内の埋土は漆喰底より上はオリーブ褐色砂質土、下では黄褐色砂質土が主体である。土師器の皿、施釉陶器の椀・急須、焼締陶器の甕・播鉢、染付磁器の椀、金属製品の銭貨(永楽通寶)、瓦など

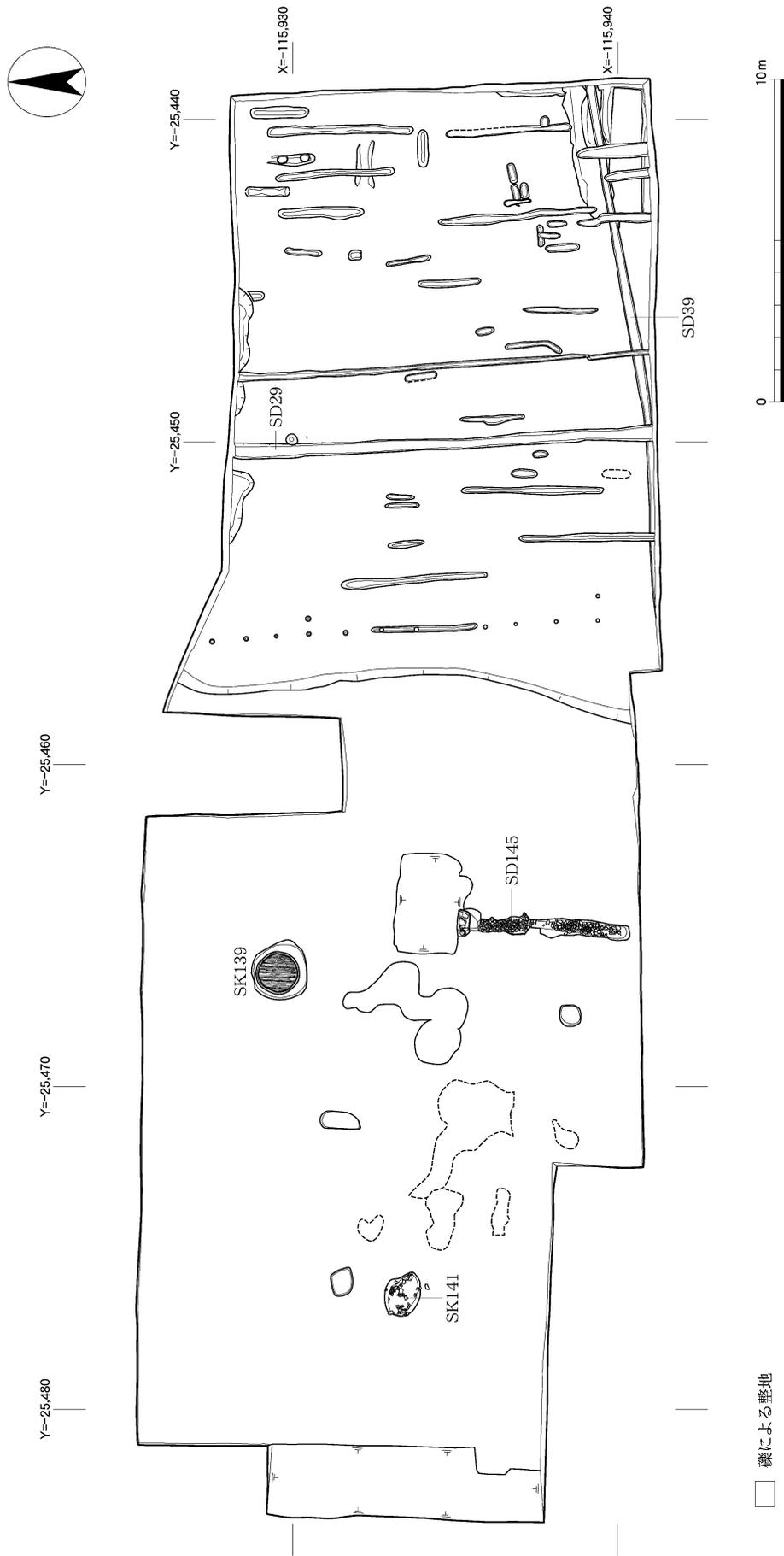


図 15 1区遺構平面図3 [江戸時代後期1] (1:200)

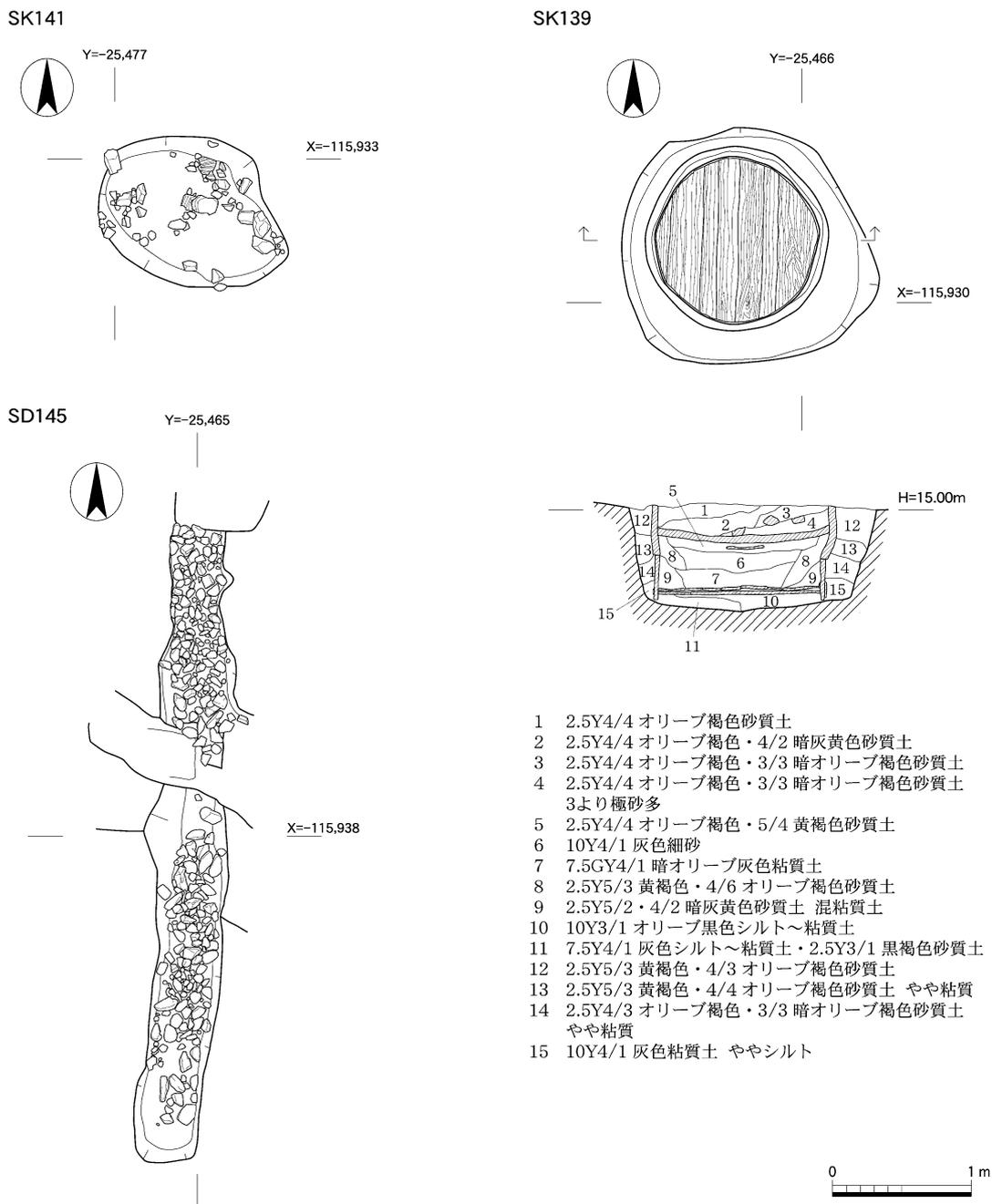


図 16 1区 SK141、SD145 平面図、SK139 実測図 (1 : 50)

が出土している。

SK141 (図 16) 調査区の東部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸 1.45 m、短軸 1.05 m、深さ 0.1 m である。埋土は褐色粘質土で、土師器の皿、施釉陶器の鉢・水、焼締陶器の甕・壺・播鉢、石製品の砥石などが出土している。

(3) 2区の遺構

1) 基本層序 (図 17、図版 8)

基本層序は、現代耕作土の下は近世の耕作土 (図 17 - 1 ~ 4 層) で、その下は地山となる。地山は削り出されて水田畦畔として利用され、その南北は中世の水田耕作土の堆積層 (図 17 - 5 ~ 10 層) となる。地山はオリーブ褐色粘質土でマンガン粒が混じっている。

2) 長岡京期の遺構

SK 6 (図 17、図版 8) 調査区の北西隅で検出した土坑である。南側を SN 1 に切られているため、規模・形状は不明である。東西幅 0.4 m、南北幅 0.3 m 以上、深さ 0.05 m である。埋土は灰黄褐色砂質土で、土師器の甕が出土している。

SK 7 (図 17、図版 8) SK 6 の北側で検出した土坑である。北側を SN 2 に切られているため、規模・形状は不明である。東西幅 0.55 m、南北幅 0.4 m 以上、深さ 0.15 m である。埋土は灰黄褐色砂質土で、土師器の皿・甕、須恵器の杯身が出土している。

3) 室町時代の遺構

SL 3 (図 17) 長岡京期の遺構面を削り出して形成された、断面台形の東西方向の畦畔である。上端の幅は 0.4 ~ 0.6 m、下端の幅は 1.1 ~ 1.2 m である。なお、この畦畔は古地図によると条里の坪境の位置にあっている。

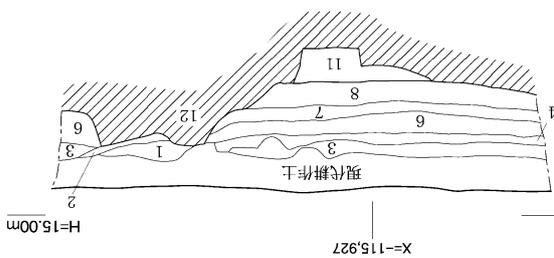
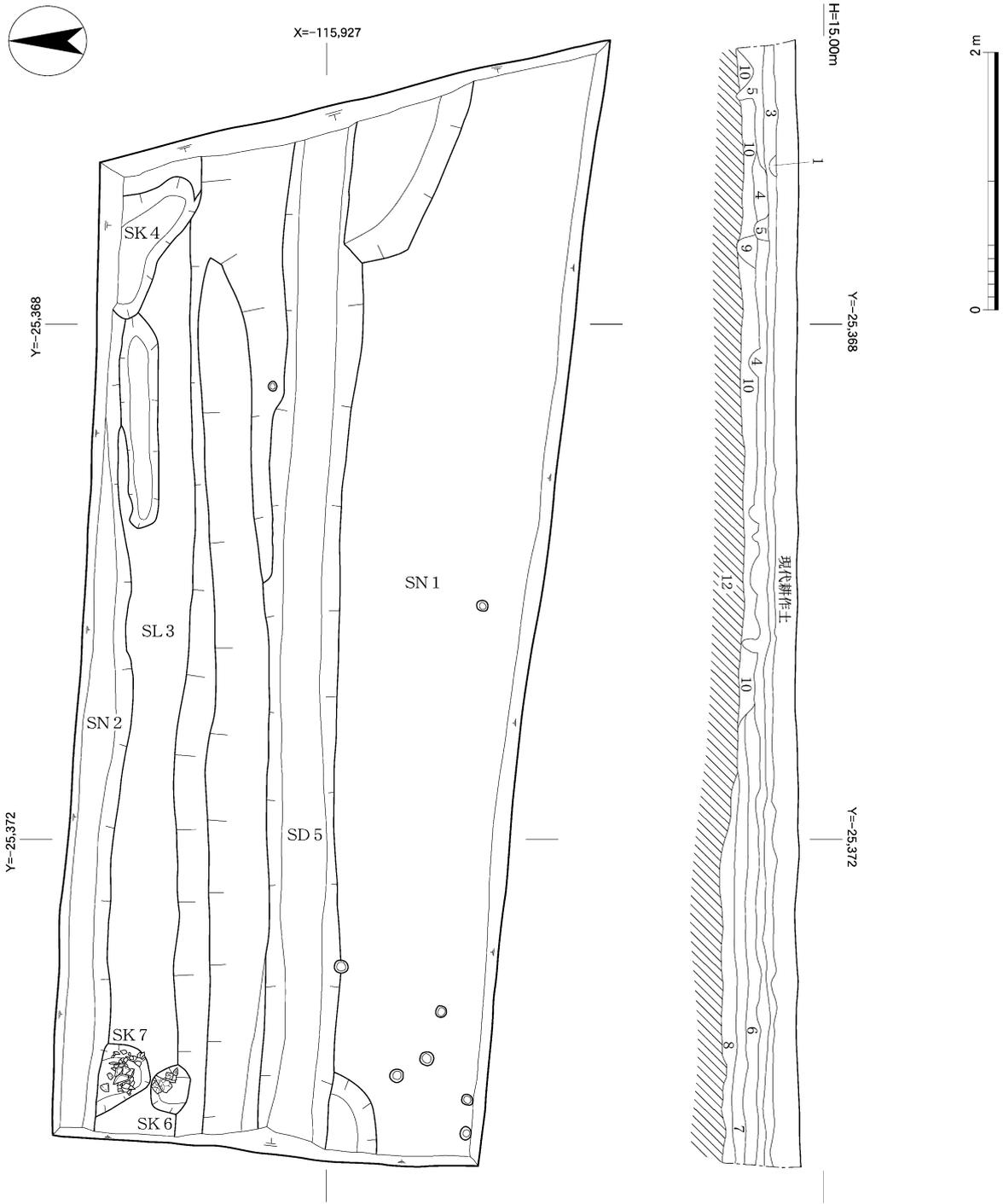
SN 1 (図 17) SL 3 の南側で検出した水田遺構である。耕作土は東側で 1 層、西側では 3 層に分かれる。深さは東側で 0.1 m、西側では 0.35 m である。土師器の皿、瓦器の椀・羽釜、焼締陶器の甕・播鉢などが出土している。他に「理」字を刻印した平瓦、土馬の脚、竈の破片がある。

SN 2 (図 17) SL 3 の北側で検出した水田遺構である。耕作土は 1 層で、深さは 0.2 m である。瓦、瓦器の椀が出土している。

SD 5 (図 17) SN 1 の下部で検出した、SL 3 に平行した東西の溝である。断面は逆台形で、幅は 0.5 ~ 0.6 m、深さは 0.2 ~ 0.4 m である。埋土は暗灰黄色粘質土で、平瓦、瓦器の鍋が出土している。

4) 江戸時代の遺構

SK 4 (図 17) 調査区の北東隅で検出した不整形な土坑である。埋土は黄褐色砂で、洪水時に浸食した箇所には砂が堆積したと思われる。長さ 1.15 m 以上、幅 0.55 m 以上である。SL 3 を切っている。寛永通寶が出土している。



- 1 2.5Y5/3 黄褐色・4/6 オリーブ褐色砂質土 砂多
- 2 2.5Y4/1 黄灰色・4/6 オリーブ褐色砂質土
- 3 2.5Y4/4・4/6 オリーブ褐色砂質土 砂多
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色・4/6 オリーブ褐色砂質土
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色～5/3 黄褐色砂質土
- 6 2.5Y5/4 黄褐色・4/6 オリーブ褐色砂質土 やや粘質
- 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色・10YR5/6 黄褐色砂質土 やや粘質
- 8 2.5Y4/3・4/6 オリーブ褐色砂質土 混マンガ
- 9 2.5Y5/2 暗灰黄色～5/3 黄褐色砂質土 砂多
- 10 2.5Y5/3 黄褐色・10YR4/6 褐色砂質土 砂多混マンガ
- 11 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 12 2.5Y4/6 オリーブ褐色・10YR4/6 褐色粘質土 混マンガ

図 17 2区遺構実測図 (1 : 50)

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表3)

今回出土した遺物は、整理箱で60箱、内9箱は木製品である。弥生時代から江戸時代までのものがある。内容は土器類が最も多く、次いで木製品が多い。その他、石製品、金属製品、土製品が出土している。

弥生時代の石刀、古墳時代の須恵器の杯が後世の遺構・包含層から出土している。

長岡京期の遺物には、土師器の甕・皿、須恵器の杯、土製品のカマド・土馬、「理」字を刻印した平瓦がある。

平安時代の遺物には、土師器の甕・皿・杯、須恵器の甕・杯、緑釉陶器の椀、灰釉陶器の椀などがある。

室町時代の遺物には、土師器の皿、瓦器の椀・皿・鍋・羽釜・火舎、焼締陶器の備前焼・信楽焼の甕・播鉢、輸入磁器の青磁椀・白磁椀、銭貨（天聖元寶・熙寧元寶、元豊通寶、元祐通寶、永樂通寶）、木製品の漆器杯、箸・椀・柿経・下駄・木球・曲物・桶、金属製品の小刀、石製品の砥石、土製品の轆の羽口・鋳型、他に鉄滓などがある。

江戸時代の遺物には、土師器の皿、焼締陶器の信楽焼の甕・播鉢、施釉陶器の椀、肥前磁器（染付）の椀・皿、木製品の漆器杯、箸・下駄・曲物・桶・折敷、銭貨（寛永通寶）、金属製品の鉄釘・煙管、石製品の砥石・硯などがある。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	石器		石器1点		
古墳時代	須恵器		須恵器1点		
長岡京期	土師器、須恵器、瓦、土製品		土師器4点、須恵器1点、瓦1点、土製品2点		
平安時代	土師器、須恵器、瓦、緑釉陶器、灰釉陶器				
室町時代後期 ～江戸時代初期	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、木製品、金属製品、土製品、石製品		土師器30点、瓦器8点、施釉陶器6点、焼締陶器4点、木製品16点、金属製品3点、土製品3点、石製品1点		
江戸時代後期	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、木製品、金属製品、土製品、石製品		土師器24点、施釉陶器3点、焼締陶器1点、磁器3点、染付磁器1点、木製品5点、金属製品6点、土製品3点、石製品3点		
合計		70箱	130点 (10箱)	57箱	3箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より10箱多くなっている。

(2) 土器類

1) 1区出土の土器類

古墳時代の土器類 (図 18、図版 10)

整地層出土土器 (1) 須恵器の甗の体部である。回転を利用したナデ調整を施す、ヘラキリのまま無調整である。復元体部径 8.2 cm、残存高 3.2 cm である。胎土・焼成ともに良好で、色調は灰色である。

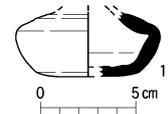


図 18 1区出土土器実測図 1 [古墳時代] (1:4)

室町時代後期から江戸時代初期の土器類 (図 19・20、図版 9・10)

SD41 出土土器 (2・3) ともに土師器の皿である。2は小型の手捏ね成形の皿で、復元口径 4.9 cm、器高 0.9 cm である。胎土に雲母・長石などの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色である。3は口縁部のみが残存で、ヨコナデ調整を施す。復元口径 12.2 cm、胎土に長石・石英などの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調はにぶい灰白色である。

SK60 出土土器 (4) 丸味を帯びた底部から、口縁部が外上方にのびる小型の土師器の皿である。底部を焼成後、穿孔している。磨滅が激しく調整は不明である。復元口径 6.2 cm、器高 1.7 cm である。胎土に長石・石英などの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は灰白色である。

P72 出土土器 (5) 平坦な底部から、体部が短く外上方にのびる小型の土師器の皿である。口縁部はヨコナデ調整を施す。復元口径 6.4 cm、器高 1.0 cm である。胎土に雲母・チャートなどの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は浅黄橙色である。

SD114 出土土器 (6) 平坦な底部から、体部が短く外上方にのびる小型の土師器の皿である。内面に二次焼成を受けた箇所がある。口縁部はヨコナデ調整、底部は無調整である。復元口径 7.0 cm、器高 1.1 cm である。胎土に長石・石英・チャートなどの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は浅黄橙色である。

SK99 出土土器 (7・8) 7は平坦な底部から、体部が短く外上方にのびる小型の土師器の皿である。口縁部・内面はヨコナデ調整、底部は無調整である。復元口径 6.0 cm、器高 1.3 cm である。胎土に雲母・長石・チャートなどの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調はにぶい橙色である。

8は瓦質土器の羽釜である。直立する口縁部に鏝を貼り付けたもので、口縁端部は外傾し端部上面に浅い段がめぐる。ナデによる調整を施す。胎土に雲母・長石・石英などの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は黄灰色である。

P234 出土土器 (9) 土師質土器の小壺である。手捏ね成形で、口径 2.2 cm、器高 2.65 cm である。胎土・焼成とも良好で、色調は灰白色である。

SK370 出土土器 (10) 土師質土器の小壺である。手捏ね成形で、口径 2.3 cm、器高 2.6 cm である。胎土・焼成とも良好で、色調は灰白色である。

SD50 出土土器 (11) 常滑の甕の口縁部である。胎土・焼成とも良好で、色調は黄灰色である。

SD255 出土土器 (12～22) 12～15は土師器の皿である。12は丸味を帯びた底部から、体

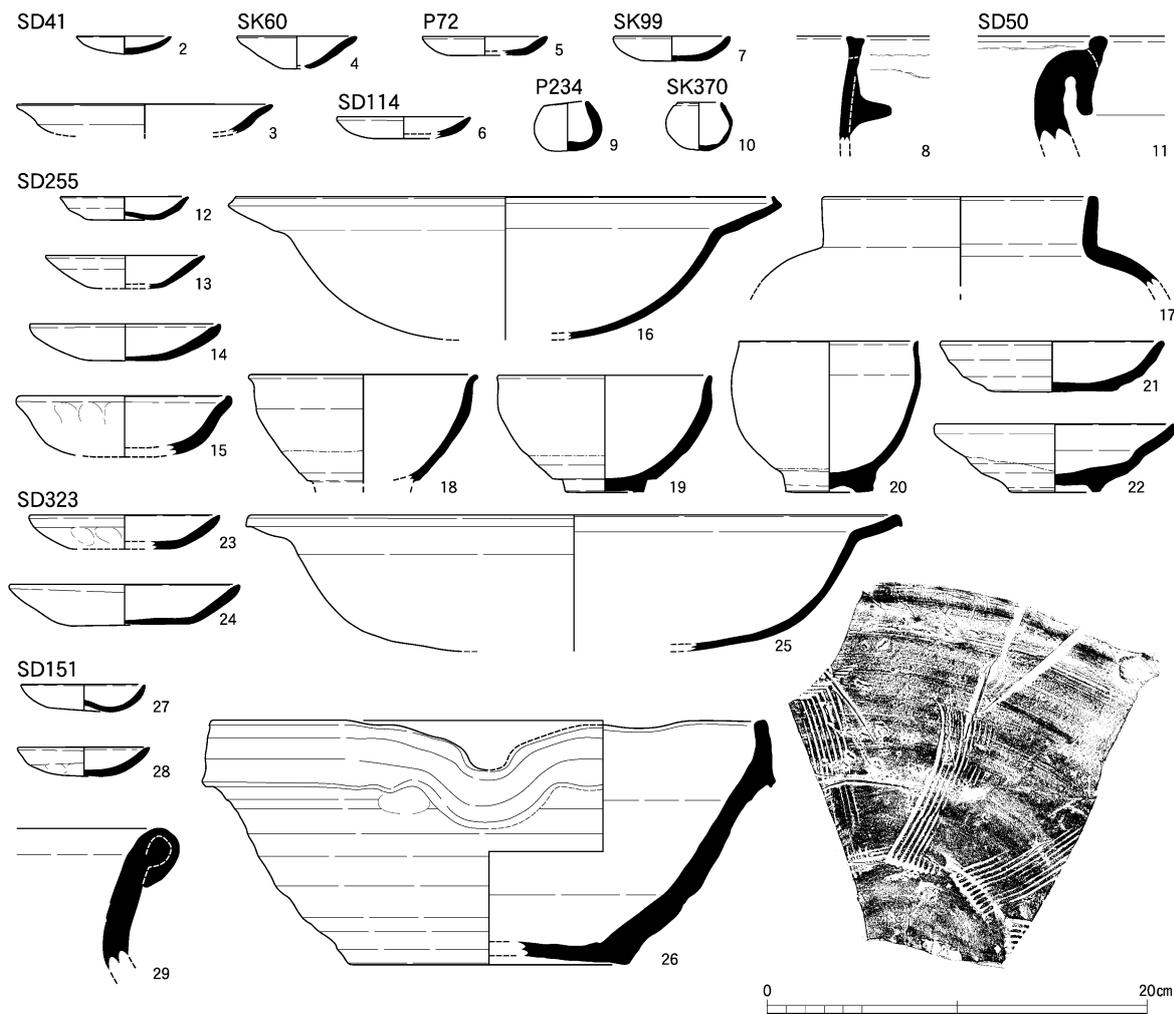


図 19 1区出土土器実測図2 [室町時代後期から江戸時代初期] (1 : 4)

部が短く外上方にのびる小型の皿で、底部は若干凹む。口縁部・内面はヨコナデ調整、他は無調整である。口径 6.6 cm、器高 1.25 cmである。胎土に雲母・長石・チャートなどの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄色である。13・14は平坦な底部から、体部が短く外上方にのびる小型の皿である。口縁部・内面はヨコナデ調整、他は無調整である。13は復元口径 8.3 cm、器高 1.75 cm、14は復元口径 9.8 cm、器高 1.9 cmである。ともに胎土に長石などの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は、どちらもにぶい黄色である。15は体部が外湾気味に外上方にのび、口縁端部は短く立ち上がり丸味を帯びる。口縁部・内面はヨコナデ調整、体部上半に指オサエ痕が残る。胎土に雲母・長石などの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は暗灰黄色である。

16は土師質土器の鍋である。体部・底部は半球形で、口縁部は外方へ開き、端部は内側に突出し断面楔形になる。復元口径は 28.2 cmである。体部はケズリののちナデ、口縁部内面は板状の工具で強くナデている。他はヨコナデ調整で、内外面にススが付着している。胎土・焼成とも良好で、色調は褐灰色である。

17は瓦質土器の壺である。口縁部は体部から短く直立し、端部は丸味を帯びる。復元口径は 14.0 cmである。全体にナデ調整を施し、口縁部外面にはヘラミガキがみられる。胎土に石英・長石・

チャートなどの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は黒色である。

18～22は施釉陶器である。18・19は美濃・瀬戸系の天目椀である。ロクロ成形で、体部下半は回転を利用したヘラケズリ、高台部は削り出している。体部下半・底部を除き、黒褐色の釉が掛かっている。18は復元口径11.7 cm、19は復元口径11.0 cm、器高6.15 cmである。20は美濃・瀬戸系の椀である。ロクロ成形で、体部下半・底部を除き、灰白色の釉が掛かっている。復元口径5.3 cm、器高8.0 cmである。21は志野の皿で、ロクロ成形である。底部内面を除き灰白色の長石釉が施されている。口径11.5 cm、器高2.7 cmである。内底面・底部に目跡が残る。22は唐津の皿である。ロクロ成形で、体部下半・底部を除き、灰オリーブ色の釉が掛かっている。口径12.4 cm、器高3.6 cmである。内底面に目跡が残る。

SD323 出土土器 (23～26) 23・24は土師器の皿である。平坦な底部から、体部が短く外上方にのびる皿で、口縁部・体部内面はヨコナデ調整、内底面は仕上げナデ、他は未調整である。23には体部に指オサエ痕が残る。23は復元口径9.8 cm、器高1.85 cmである。24は口径11.95 cm、器高2.15 cmである。胎土に長石・石英・チャートなどの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色である。

25は土師質土器の鍋である。体部・底部は半球形で、口縁部は外方へ開き、端部は外方に若干肥厚する。復元口径は34.0 cmである。体部はケズリののちナデ、他はヨコナデ調整で、内外面にススが付着している。胎土・焼成とも良好で、色調は黄灰色である。

26は備前の焼締陶器の播鉢である。10条1単位の櫛書きの播目が、底部から上方に刻まれている。口縁部に重ね焼きの痕跡が残る。復元口径28.7 cm、器高12.95 cm、復元底径14.4 cmである。

SD151 出土土器 (27～29) 27・28は土師器の皿である。丸味を帯びた底部から、体部が短く外上方にのびる小型の皿である。27は底部が凹む。口縁部・内面はヨコナデ調整、他は無調整である。27は口径6.4 cm、器高1.45 cmである。28は口径6.9 cm、器高1.55 cmである。胎土に雲母・長石・チャートなどの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は灰黄褐色である。

29は備前の焼締陶器の口縁部が玉縁になる大甕である。

SD170 出土土器 (30～49) 30～40は土師器の皿である。30は体部・口縁部がゆるやかに外反するいわゆる「へそ皿」である。口縁部・内面はヨコナデ調整を施す。復元口径7.0 cm、器高1.7 cmである。胎土に長石・チャートなどの砂粒を含み、焼成はやや良好である。色調は黄橙色である。31～34は底部から体部が明瞭に屈曲して外反する。無調整の底部を除いてヨコナデ調整を施す。口径は7.3～9.5 cm、器高1.2～1.55 cmである。胎土に雲母・長石・チャートなどの砂粒を含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色である。35～38は体部・口縁部が屈曲して外半する。口縁部・内面はヨコナデ、他は無調整である。体部下半に指オサエ痕が残るものがある。口径は7.6～11.7 cm、器高1.6～2.55 cmである。胎土に長石・チャートなどの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は35・37はにぶい黄橙色、36は黄灰色、38は浅黄橙色である。39・40は丸味を帯びた底部から、口縁部が外上方にのびる皿である。40は口縁部と内底面の間に浅い圏線がめぐり、口縁部に炭素が付着している。口縁部・内面はヨコナデ、他は無調整である。39は口径8.75 cm、器高2.1

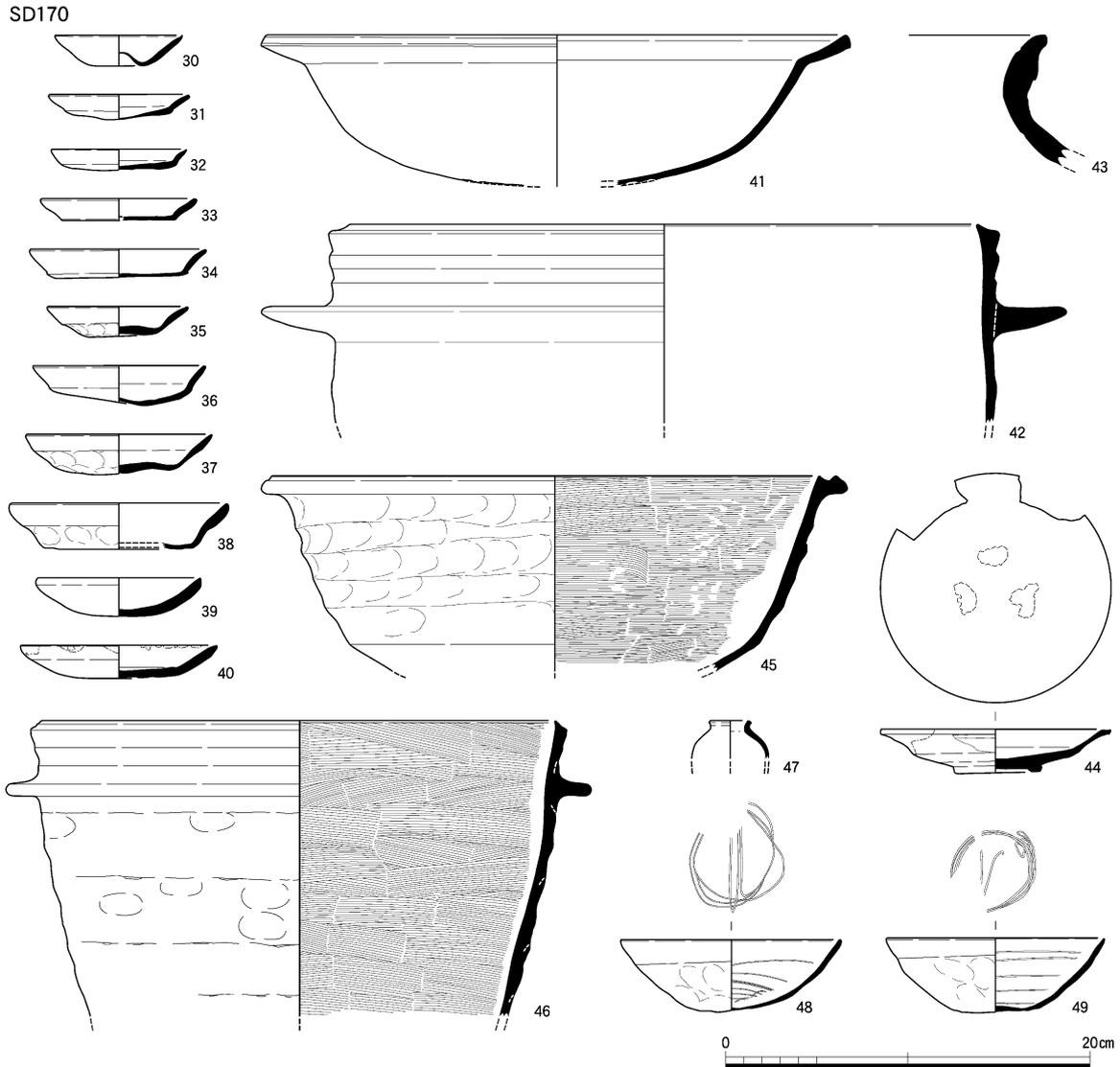


図20 1区出土土器実測図3 [室町時代後期から江戸時代初期] (1:4)

cmである。28は口径10.7cm、器高1.8cmである。胎土に雲母・長石・チャートなどの砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は黄灰色である。

41・42は土師質土器である。41は鍋で、体部・底部は半球形で、口縁部は外方へ開き、端部は外方に若干肥厚する。体部はケズリののちナデ、他はヨコナデ調整で、内外面にススが付着している。胎土・焼成とも良好で、色調は黄灰色である。42は羽釜で、直立する口縁部に鑊を貼り付けたもので、口縁端部は外傾し口端部外面に2条の浅い段がめぐる。復元口径は34.2cmである。ナデによる調整を施す。

43は常滑の焼締陶器の甕である。

44は唐津の施釉陶器の皿である。高台は削り出しであるが、端面に糸切りの痕跡が残る。体部下半・底部を除き、灰オリーブ色の釉が掛かっている。口径12.55cm、器高2.4cm、高台径4.0cmである。内底面に3箇所が目跡が残る。

45～47は瓦質土器である。45は鍋で、内湾気味に外上方にのびる体部から強く外方に屈曲し

た口縁部をもつ。体部外面は密に指オサエが施され、凹凸が激しい。内面は丁寧に刷毛調整を施す。復元口径 30.8 cm である。胎土に長石・雲母・チャートなどの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰黄色である。46 は羽釜で、直立する口縁部に鏝を貼り付けたもので、口縁端部は外傾し口端部外面に 2 条の浅い段がめぐる。復元口径 28.0 cm である。体部外面は凹凸が激しく指オサエが目立つ。内面は丁寧に刷毛調整を施す。胎土・焼成ともに良好で、色調は灰黄色である。47 は小壺で、手捏ね成形で球形の体部をもち、口縁は短く立ち上がる。復元口径は 2.3 cm である。胎土・焼成ともに良好で、色調は灰白色である。

48・49 は瓦器の椀である。体部・口縁部はほぼ直線的に外上方にのび、口縁端部は丸味を帯びる。高台は付かない。口縁部・内面はヨコナデ、体部・底部は指オサエを施す。内面に粗い同心円の暗文が施される。胎土・焼成ともに良好で、色調は黒色である。

江戸時代後期の土器類（図 21、図版 10）

整地層出土土器(50～66) 50～54 は土師器の皿である。50～52 は小型の手捏ね成形の皿で、口径 5.5 cm、器高 1.1～1.25 cm である。胎土に石英・長石などの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は 50 は浅黄橙色、51・52 はにぶい黄橙色である。53 は丸味を帯びた底部から、口縁部が外上方にのびる皿である。口径 9.2 cm、器高 1.9 cm である。54 は底部から体部が明瞭に屈曲して外反する。口縁部と内底面の間に浅い圏線がめぐる。復元口径 10.8 cm、器高 1.6 cm である。口縁部・内面はヨコナデ、他は無調整である。54 は体部下半に指オサエ痕が残る。胎土に石英・長石・チャートなどの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰白色である。

55～61 は土師質土器である。55 は鉢で、丸味を帯びた底部から内湾して上方にのび、口縁部は内に入り込む。復元口径は 7.8 cm である。胎土に石英・長石などの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰白色である。56～60 は手捏ね成形の小壺である。口径 2.1～2.6 cm、器高 2.1～3.2 cm である。胎土・焼成とも良好で、色調は灰白色である。61 は鍋で、体部・底部は半球形で、口縁部は外方へ開き端部は外方に若干肥厚する。復元口径は 28.2 cm である。体部はケズリののちナデ、他はヨコナデ調整で、内面にススが付着している。胎土・焼成とも良好で、色調は黄橙色である。

62 は染付磁器の椀である。外面を 4 区画に分け、角区に松樹文を描く。内底面に圏線の中に松樹、口縁内部にくずれた雷文を描く。口径 10.4 cm、器高 6.15 cm、高台径 4.3 cm である。

63・64 は国産磁器（白磁）である。63 は小型の筒形椀、64 は小型の平椀である。63 は口径 5.8 cm、器高 6.7 cm、高台径 4.0 cm、64 は口径 6.0 cm、器高 3.1 cm、高台径 2.2 cm である。

65・66 は施釉陶器である。65 は京・信楽系の施釉陶器の椀である。外面に赤・緑・白の 3 色で草花文を描く。口径 8.8 cm、器高 5.75 cm、高台径 2.8 cm である。66 は唐津の皿である。高台は削り出しであるが、端面に糸切りの痕跡が残る。体部下半・底部を除き、灰オリーブ色の釉が掛かっている。口径 12.3 cm、器高 3.6 cm、高台径 4.4 cm である。内底面に 3 箇所が目跡が残る。

SK 1 出土土器（67・68）土師器の皿である。67 は小型の手捏ね成形の皿で、復元口径 5.3 cm、器高 1.15 cm である。胎土に石英・長石などの砂粒を含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙

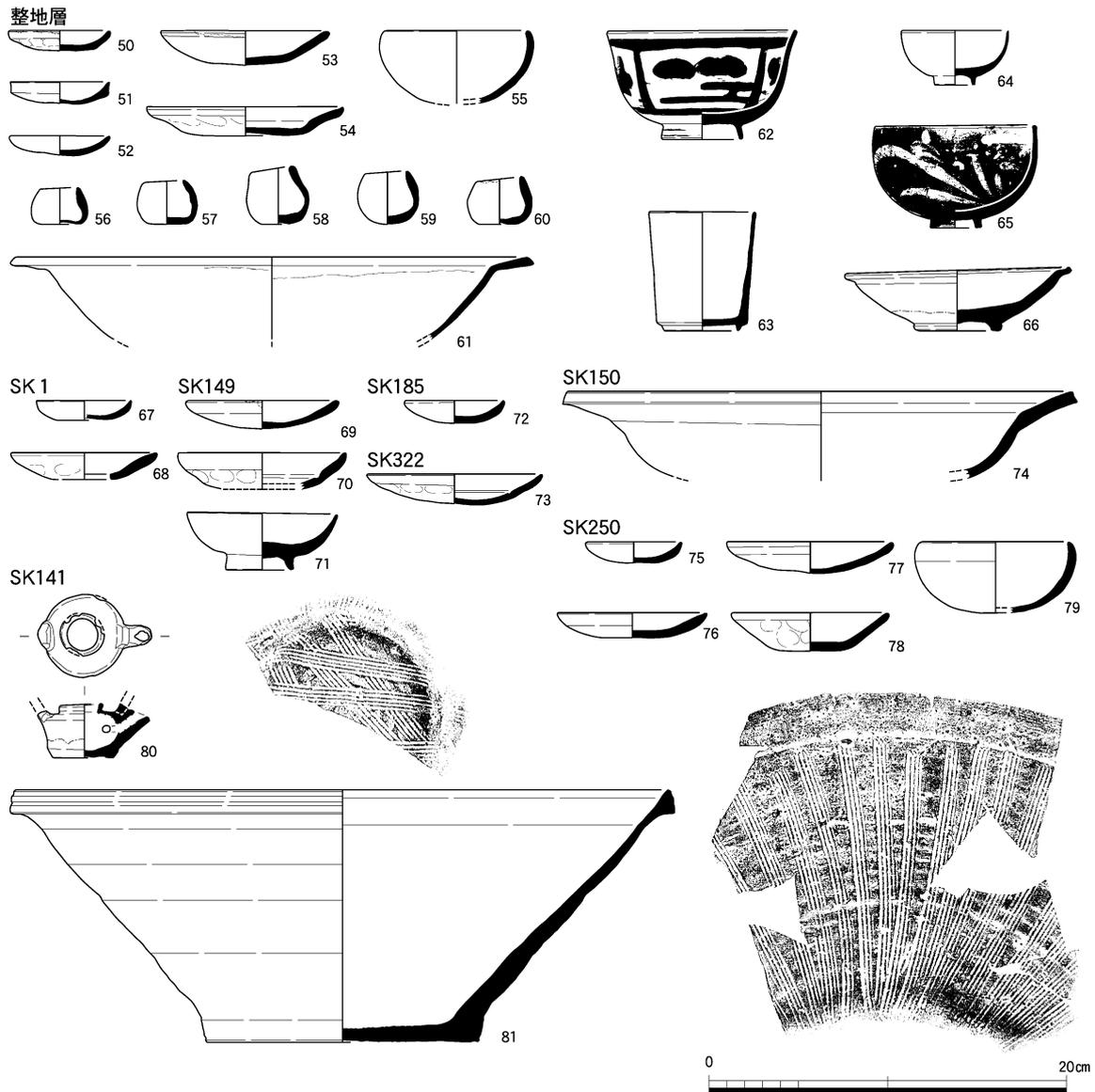


図 21 1区出土土器実測図4 [江戸時代後期] (1 : 4)

色である。68は丸味を帯びた底部から、口縁部が外上方にのびる皿である。口径8.1cmで、胎土に石英・長石・チャートなどの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色である。

SK149出土土器(69～71) 69・70は丸味を帯びた底部から、口縁部が外上方にのびる土師器の皿である。70は口縁部と内底面の間に圏線がめぐる。69は復元口径8.2cm、70は復元口径9.3cmである。胎土・焼成はともに良好である。色調は69がにぶい黄橙色、70は褐灰色である。

71は国産磁器(青磁)の小型の平碗である。緑白色の釉が施されるが、内底面の外周は露胎で、重ね焼きの痕跡が認められる。口径8.3cm、器高3.6cm、高台径3.3cmである。

SK185出土土器(72) 小型の手捏ね成形の土師器の皿で、口径5.4cm、器高1.3cmである。胎土に石英・長石などの砂粒を含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色である。

SK322出土土器(73) 丸味を帯びた底部から、口縁部が外上方にのびる土師器の皿で、口縁部と内底面の間に圏線がめぐる。復元口径9.6cm、胎土・焼成はともに良好である。色調はにぶ

い橙色である。

SK150 出土土器 (74) 土師質土器の鍋である。復元口径 28.0 cm で、胎土・焼成はともに良好である。色調はにぶい黄橙色である。

SK250 出土土器 (75 ~ 79) 76 ~ 78 は土師器の皿である。75 は小型の手捏ね成形の皿で、口径 5.2 cm、器高 1.2 cm である。胎土に石英・長石などの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰黄色である。74 ~ 78 は丸味を帯びた底部から、口縁部が外上方にのびる皿である。口縁部・内面はヨコナデ、他は無調整である。78 は体部下半に指オサエ痕が残る。口径は 8.5 ~ 9.0 cm、器高 1.2 ~ 2.2 cm である。胎土に石英・長石などの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は 76 が灰白色、77 はにぶい橙色、78 は灰黄色である。

79 は土師質土器の鉢である。丸味を帯びた底部から内湾して上方にのび、口縁部は内に入り込む。復元口径は 8.2 cm である。胎土・焼成とも良好である。色調は暗灰色である。

SK141 出土土器 (80・81) 80 は美濃・瀬戸系の鉄釉の小型の水注である。胴部から上半に黒褐色の釉が掛かる。底部は削り出している。

81 は信楽の焼締陶器の播鉢である。3 条 1 単位の櫛書きの播目が、底部から上方に密に刻まれている。内底面は 5 条 1 単位の櫛書きの播目が、上下 3 単位が交差して刻まれている。復元口径 36.2 cm、器高 14.2 cm、復元底径 15.0 cm である。

2) 2 区出土の土器類

長岡京期の土器類 (図 22、図版 10)

SK 7 出土土器 (82 ~ 86) 82 ~ 85 は土師器の皿である。表面の磨滅が激しく詳細な調整の観察はできない。85 は口径 18.05 cm、器高 3.8 cm である。他の皿の復元口径は 14.9 ~ 15.9 cm、器高は 1.85 ~ 2.7 cm である。胎土に長石・石英・などの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色である。

86 は須恵器の杯身である。底部から屈曲して体部・口縁部が長線的に外上方にのび、口縁端部は丸味を帯びる。底部と体部の境に台形の高台が付く。口縁部・体部はロクロナデを施す。口径 15.7 cm、器高 6.2 cm、高台径 11.0 cm である。胎土・焼成ともに良好で、色調は灰白色である。

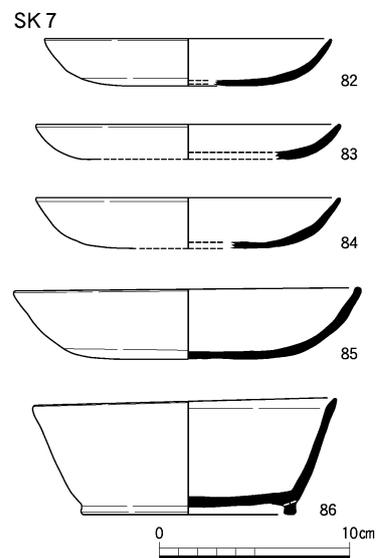


図 22 2 区出土土器実測図
[長岡京期] (1 : 4)

(3) 木製品

1) 室町時代後期から江戸時代初期の木製品 (図 23、図版 11)

漆器皿 (87) 全面に黒漆を塗った台付の皿である。高台内部に赤漆で「吉？」と書かれている。口径 11.14 cm、高台径 7.6 cm、器高 3.45 cm である。1 区の SD323 から出土した。

椀 (88・89) 体部・口縁部が若干内湾するが、ほぼ直線的に外上方にのび、低い高台をもつ椀である。88 は柀目横木取り、89 は板目横木取りされたアラガタを用いて轆轤成形されている。高台内は手削りで調整されている。器壁には轆轤目が残り、成形後は細かな調整はされずに使用されている。88 は口径 14.6 cm、高台径 8.0 cm、器高 6.8 cm、89 は口径 17.4 cm、高台径 7.1 cm、器高 7.7 cm である。88 は 1 区の SD255、89 は 1 区の SD50 から出土した。

下駄 (90・91) 丸型の連歯下駄である。90 は後歯の部分で両横緒の孔が穿たれている。かなり使い込まれたとみえ、歯の磨滅が激しい。91 も後歯の部分と思われるが、横緒の孔は認められない。90 は現存長 12.1 cm、幅 8.9 cm、高さ 1.4 cm、91 は現存長 10.8 cm、現存幅 6.8 cm、高さは 2.35 cm である。90 は 1 区の SD323、91 は 1 区の SD255 から出土した。

木球 (92・93) 円盤状の木製品で、毬杖遊びで使用される木球と思われる。側面は平滑に削り、上・下面は粗く面取りされている。93 は上・下面の中央部が凹み真ん中に孔が穿たれており、別の用途も考えられる。92 は径 4.3 cm、厚さ 2.9 cm、93 は径 4.6 cm、厚さ 2.8 cm である。いずれも 1 区の SD255 から出土した。

柄杓 (94・97) 94 は柄杓などに用いられる小型の曲物の底板である。平面を鉋風の工具で平滑にしている。径 8.4 cm、厚さ 0.9 cm である。97 は柄杓の柄である。柄の先端は尖り、先端から 11.4 cm のところに曲物を固定する木釘孔が認められる。断面は矩形で、長さ 41.6 cm、幅 2.4 cm、厚さ 1.0 cm である。いずれも 1 区の SD255 から出土した。

箸 (95・96) 割木を八面体になるように粗く削り、両端を尖らせている。長さは 95 が 22.7 cm、96 が 22.8 cm で、ともに 7 寸の箸である。いずれも 1 区の SD255 から出土した。

棒 (98) 断面隅丸矩形の棒状の木製品である。棒の一端の両側に切込みを入れ、途中で切断しているが、他端の片面には目盛状の線刻が施されている。線刻の間隔は 1.0 cm、1.2 cm、1.5 cm とばらばらで統一した基準はない。現存長 51.25 cm、幅 2.9 cm、厚さ 1.15 cm である。用途は不明である。1 区の SD255 から出土した。

曲物 (99) 曲物の底板である。平面を鉋風の工具で平滑にしている。側面に側板を結合するための木釘穴が認められる。復元径 25.0 cm、厚さ 0.9 cm である。1 区の SD151 から出土した。

折敷 (100・101) 折敷の底板である。角を削って丸くしてある。側板を結合するための木釘穴が、100 では一辺に 4 箇所、101 では一辺に 3 箇所穿たれている。101 には再利用された時の刃物による切傷が認められる。100 は長さ 23.0 cm、現存幅 7.8 cm、厚さ 0.4 cm、101 は長さ 28.85 cm、現存幅 8.8 cm、厚さ 0.7 cm である。いずれも 1 区の SD170 から出土した。

板 (102) 板状の木製品である。箱物の底板と考えられるが、一部に刃物による切傷が認めら

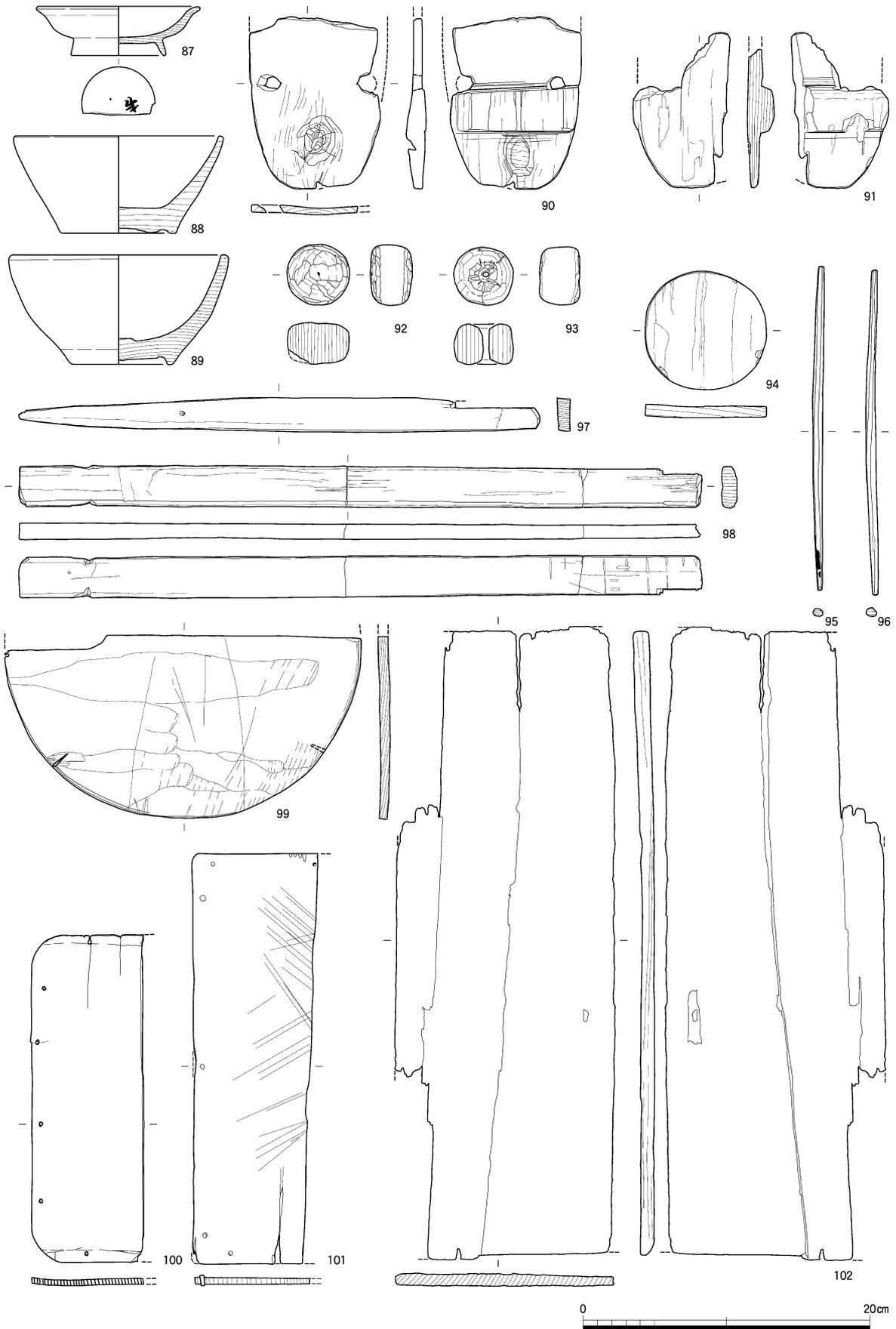


図 23 木製品実測図 1 [室町時代後期から江戸時代初期] (1 : 4)

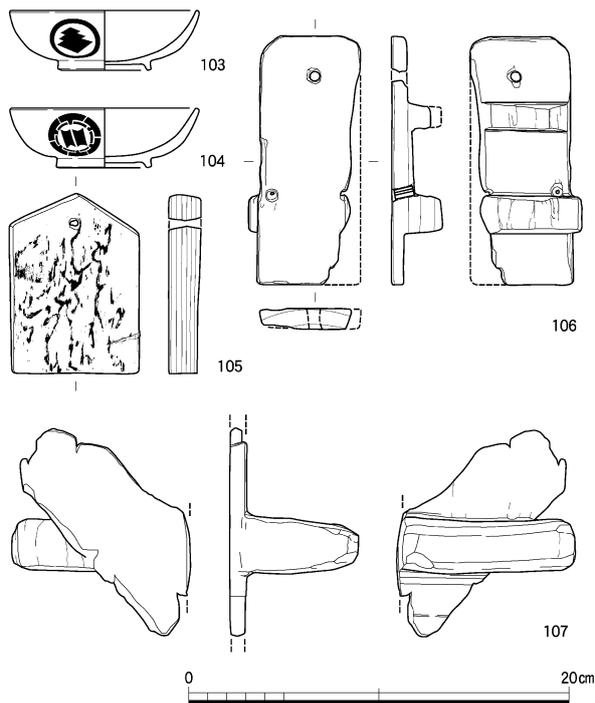


図24 木製品実測図2 [江戸時代後期] (1:4)

れる。長さ 44.3 cm、現存幅 15.35 cm、厚さ 0.9 ~ 1.1 cm である。1 区の SK342 から出土した。

他に、1 区の SD50 から柿経と思われる薄板に墨書したものが出土しているが、「南」という字以外は文字の判読はできない。

2) 江戸時代後期の木製品 (図 24、図版 11)

漆器皿 (103・104) 漆器の台付の皿である。103 は内面に赤漆、外面には黒漆を塗った上にほぼ等間隔に 3 箇所銀泥で丸に三階菱を描いている。口径 10.0 cm、器高 3.15 cm、高台径 5.0 cm である。104 は、103 と器形・意匠・寸法とも一致している。外面に描かれた文様 (御所車に旗) は異なるが、同一の

工房で作成されたものと思われる。いずれも 1 区の SK321 から出土した。

木札 (105) 上部の両端を削って中央を尖らせ、先端部下約 1.5 cm の所に孔が穿たれている。穿孔は両側からなされ、ほぼ中央で貫通している。長さ 9.5 cm、幅 6.85 cm、厚さ 1.7 cm である。孔に紐を通して木札として使用されたものであろう。墨書がなされた可能性が考えられるが判読は不能である。1 区の SK265 から出土した。

下駄 (106・107) 連歯下駄である。106 は角型の小型下駄で、前壺はほぼ中央に穿たれており、後歯は台より外側にはみ出している。長さ 13.1 cm、幅 5.3 cm、高さ 2.65 cm である。107 は前歯の一部と思われ、現存長 11.0 cm、現存幅 9.45、高さ 6.8 cm である。106 は 1 区の SK182、107 は 1 区の SK376 から出土した。

(4) その他の遺物

1) 瓦類 (図 25、図版 12)

平瓦 (108) 裏面に、四角内に「理」の刻印がある。2 区の SN 1 の埋土から出土した。磨滅が激しいため、調整の細かい観察はできない。

2) 石製品 (図 25、図版 12)

石刀 (109) 粘板岩製の石刀である。両面に研磨により平滑に仕上げられ、両側面には敲打痕が認められる。長さ 15.1 cm、幅 4.2 cm、厚さ 1.05 cm である。1 区の SD255 から出土した。

砥石 (110 ~ 112) 110 は凝灰岩製の砥石である。長さ 7.6 cm、幅 8.45 cm、厚さ 2.55 cm、重さ 229g である。使用面以外は割れ面または加工面である。111 は砂岩製の砥石である。長さ 9.0

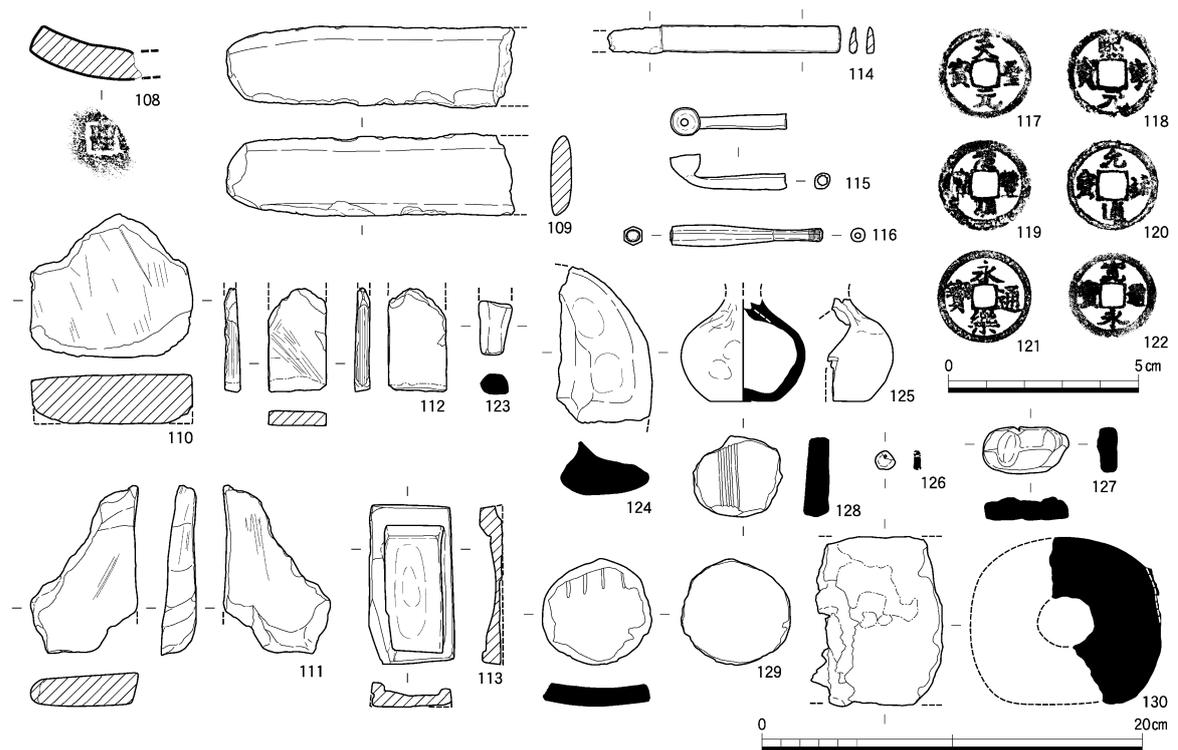


図 25 瓦類・石製品・金属製品・土製品実測図（1：4）、銭貨拓影（1：2）

cm、幅 5.6 cm、厚さ 1.85 cm、重さ 90g である。使用面以外は割れ面または自然面である。112 は短冊形をした粘板岩製の砥石である。長さ 15.45 cm、幅 3.05 cm、厚さ 0.8 cm、重さ 23g である。110・111 は 1 区の整地層、112 は 1 区の SE160 から出土した。

硯（113） 長方形で小型の粘板岩製の硯である。陸部と海部の区別はなく、硯面の真ん中が使用によって凹んでいる。長さ 8.4 cm、幅 4.3 cm、厚さ 1.3 cm、重さ 58g である。1 区の SD151 から出土した。

3) 金属製品（図 25、図版 12）

小刀（114） 鉄製の刀身と真鍮の小柄からなる小刀である。刀身は断面三角形で、柄の断面は一面は平坦で、他面は丸味を帯びる。小柄の長さ 9.35 cm、幅 1.3 cm、棟の幅は 0.35 cm である。1 区の SD151 から出土した。

煙管（115・116） 115 は雁首である。椀形の火皿をもち、脂返しは短く、首部につながる。径長さ 6.0 cm、首部の幅 0.8 cm、火皿の径は 1.5 cm である。116 は吸口で、肩部は断面八角形になる。長さ 8.0 cm、肩部の幅 1.1 cm である。いずれも 1 区の整地層から出土した。

銭貨（117～122） 117 は北宋銭の天聖元寶（初鑄年 1023 年）である。銭径 2.4 cm で、1 区の SE160 から出土した。118 は北宋銭の熙寧元寶（初鑄年 1068 年）である。銭径 2.4 cm で、1 区の整地層から出土した。119 は北宋銭の元豊通寶（初鑄年 1078 年）である。銭径 2.5 cm で、1 区の SK155 から出土した。120 は北宋銭の元祐通寶（初鑄年 1086 年）である。銭径 2.4 cm で、1 区の SE160 から出土した。121 は明銭の永楽通寶（初鑄年 1408 年）である。銭径 2.5 cm で、

1 区の SK139 から出土した。122 は寛永通寶である。錢径 2.2 cm で、1 区の SK149 から出土した。

4) 土製品 (図 25、図版 12)

土馬 (123) 祭祀品の土馬の脚部である。2 区の盛土から出土した。

カマド (124) カマドの上部の底部分である。2 区の SN 1 から出土した。

土鈴 (125) 底径 3.4 cm、残存高 5.4 cm の比較的大型の鈴である。1 区の整地層から出土した。

小玉 (126) 小型で扁平な円形の玉である。中央よりやや上に径約 0.1 cm の孔が穿たれている。径 1.0 cm、厚さ 0.4 cm で、1 区の P95 から出土した。

遊技具 (127) 小判形の土板の上に突起、短辺に平行して 2 条の突起が表現されている。型おこしで成形されている。ミニチュアの遊技具だと思われる。長さ 4.5 cm、幅 2.5 cm、厚さ 1.2 cm である。1 区の整地層から出土した。

陶製円盤 (128・129) 焼締陶器の播鉢の体部の破片を打ち欠いて円形にした土製品で、おはじきなどの遊技具として使用されたものと思われる。128 は長さ 4.3 cm、幅 4.6 cm、厚さ 1.4 cm で、1 区の整地層から出土した。129 は長さ 5.65 cm、幅 5.6 cm、厚さ 1.0 cm で、1 区の SD255 から出土した。

羽口 (130) スサ入りの粘土で作られた、轡の羽口である。被熱して赤変しており、一部に金属滓が付着している。復元径 10.0 cm、残存長 6.5 cm である。1 区の SD255 から出土した。

(5) 自然遺物

種実の同定 (図 26・27、表 4)

SK245 は、木本はアラカシの堅果・キイチゴ属・アカメガシワ・ヤダケ属がみられた。アラカシは庭木に、キイチゴ属とアカメガシワは日当たりのよい場所に生育する。草本はノミノフスマ・タカサブロウ・カヤツリグサ属 (扁平) が多い。ノミノフスマは耕作地かその周辺に、タカサブロウは水田雑草で、カヤツリグサは湿地や水田で見られる。

SD40 北端は、木本はなく、草本のノミノフスマが多い。イネの穎 (籾殻) が少しみられた。

SD50 北端は、木本はクルミ類・モモといずれも可食できるものであった。草本はタデ科 (三稜)・ノミノフスマ・アブラナ科・ミズキンバイ・タカサブロウヒエ属・スズメノテッポウが多い。タデ科 (三稜)・ノミノフスマ・アブラナ科は耕作地周辺に、ミズキンバイは水湿性の場所に、タカサブロウ・ヒエ属?・スズメノテッポウは水田・耕作地に生育する。

SD50 東西セクションは、木本はマダケかメダケの仲間があり生育していたか廃棄されたかは不明。草本は多量のタデ科 (三稜)・ノミノフスマ・エノキグサ・ウリ類・ナス・イネ科穎・スズメノテッポウが見られる。エノキグサは畑・道端に、ウリ類・ナスは人為的に廃棄されたと思われる。

SK182 は、木本はハンノキ属の球果・果実・果鱗がみられた。ハンノキ属は湿地や川岸など湿った所に生育する。草本はタカサブロウが多い。

SK183 は木本はハンノキ属とアカメガシワがみられた。草本はイネ穎 (籾殻) が多く見られた。

表4 種実等一覧表

	種名	科名	部位	分析量					
				約1900mℓ	約1700mℓ	約3200mℓ	約2600mℓ	約1000mℓ	約1500mℓ
				SK245	SD40北端	SD50北端	SD50東西セク	SK182	SK183
木本	ハンノキ属	カバノキ	球果					1	
			果実					26	1
			果鱗					○	
	アラカシ	ブナ	果実	1					
	クルミ類	クルミ	核			1			
	モモ	バラ	核			1			
	キイチゴ属	バラ	核	1					
	アカメガシワ	トウダイグサ	種子	1					1
	タケ	イネ	稈			○			
ヤダケ属	イネ	稈	○						
マダケかメダケの仲間	イネ	稈				○			
草本	ミゾソバ	タデ	果実				1	1	
	タデ科 (三稜)	タデ	果実		2	23	2460	3	
	タデ科 (扁平)	タデ	果実				2		
	ハコベ属	ナデシコ	種子			5	3		
	ノミノフスマ	ナデシコ	種子	130	70	274	320	1	
	ツメクサ	ナデシコ	種子			1			
	ヒユ属	ヒユ	種子	1		8		2	
	ザクロソウ	ザクロソウ	種子	1	1		5		
	キンボウゲ属	キンボウゲ	果実	3	1	17			
	タガラシ	キンボウゲ	果実		2	2			
	ヘビイチゴ属かキジムシロ属	バラ	果実	3		1			
	カタバミ属	カタバミ	種子	2	1				
	アブラナ科	アブラナ	種子	8	6	36			
	エノキグサ	トウダイグサ	種子	1	2	12	71	1	
	ミズキンバイ	アカバナ	種子			19		2	
	チドメグサ属	セリ	果実	1					
	アカネ科	アカネ	果実					2	
	シソ属	シソ	果実			13			
	ウリ類 (メロンの仲間)	ウリ	種子	3		4	18		1
	ナス	ナス	種子	4		6	54	1	
	ゴマ	ゴマ	種子			1			
	スイカズラ科?	スイカズラ	種子		3				
	ヤブタビラコ	キク	果実			6		2	1
	タカサブロウ	キク	果実	18	1	22	1	81	4
	コナギ	ミズアオイ	種子	4	2				
	イボクサ	ツククサ	種子	4		4			
	イネ科	イネ	穎	3	9	4	18		
	イネ	イネ	穎			1	8		21
	イネ	イネ	炭化果実			1	3		
	ヒエ属?	イネ	穎			30	1		1
	ヒエ属	イネ	穎					3	
	スズメノテッポウ	イネ				31	14		
エノコログサ属	イネ					2	1	1	
カヤツリグサ属 (三稜形)	カヤツリグサ	果実	4	1	7	24	1		
カヤツリグサ属 (扁平形)	カヤツリグサ	果実	262	3	1				
ホタルイ属						1			
その他	昆虫			10	4	19	4	2	
	虫卵包?					7	12	7	
	不明				1	2			

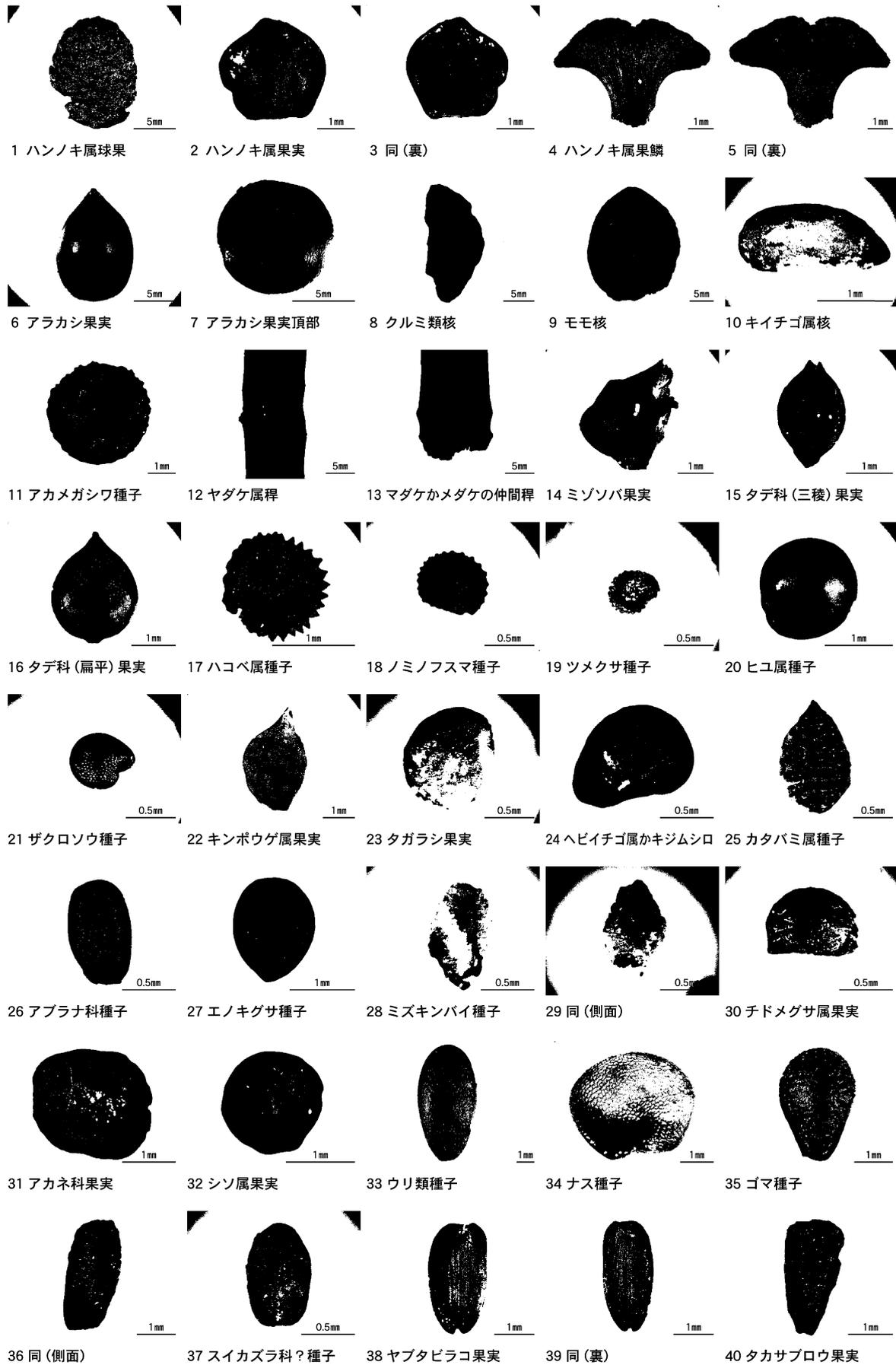


図 26 種実等 1

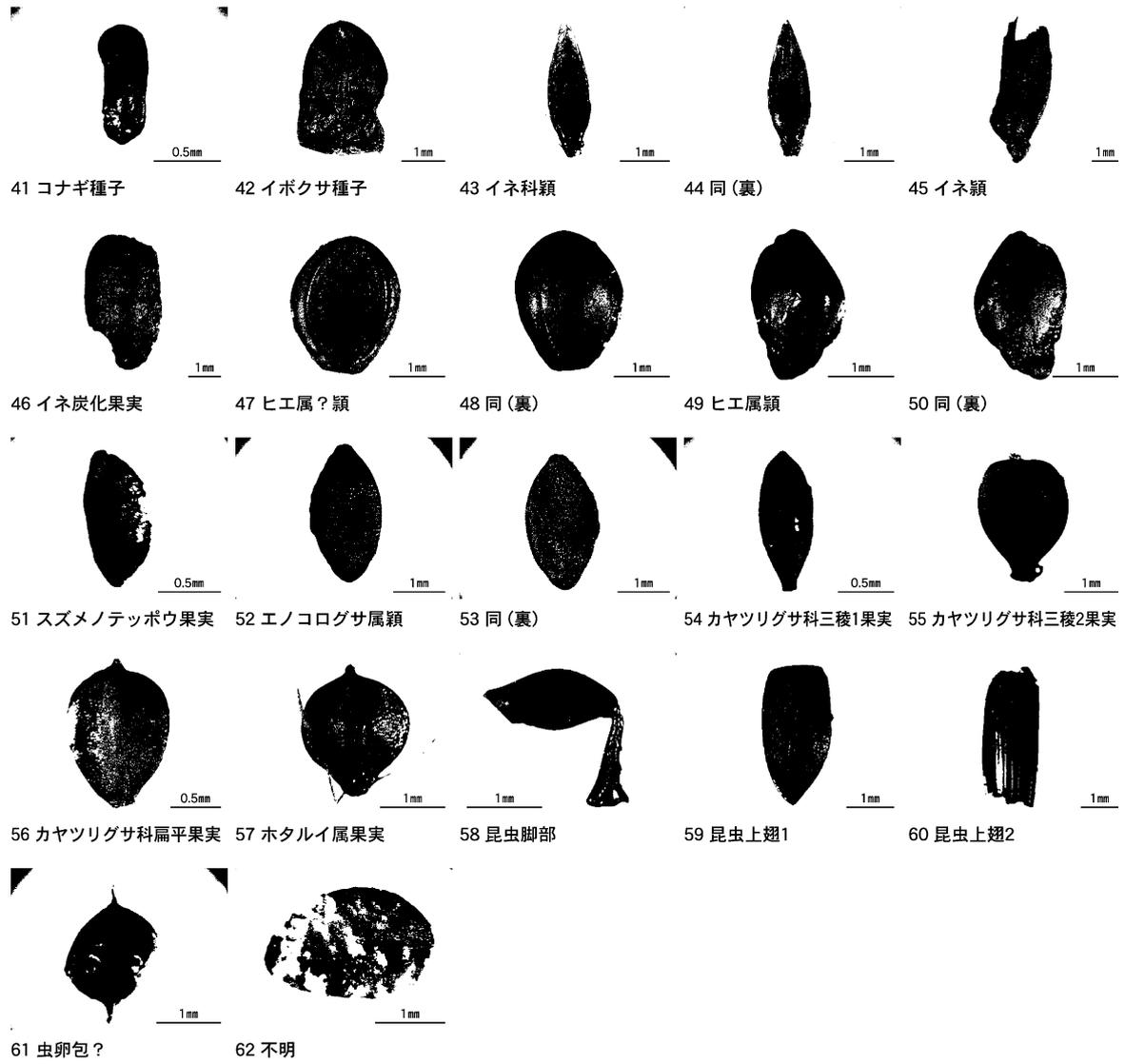


図 27 種実等 2

5. ま と め

今回の調査によって、大藪遺跡・大藪城跡の東限域の様相を明らかにすることができた。

大藪遺跡に関しては、遺跡の東限域に近く、微高地から桂川の後背湿地に移る地点に立地しているため、弥生時代の遺構を検出することはできなかった。遺物も弥生時代のものと思われる石器（石刀）が1点出土したが、弥生土器は出土しなかった。しかし、古墳時代後期の須恵器の杯身・蓋、隼が出土しているため、周囲に関連の遺構が検出される可能性があると考えられる。

また、長岡京の北限より約2町北、東四坊坊間西小路の中軸線北延長線より東3mに位置する2区で、長岡京期の遺構を検出している。

大藪城跡に関しては、調査区の西端から約15mまでは居住区と思われ、掘立柱建物、柱穴、柵、土坑などを密集した状態で検出した。居住区は、溝（SD170）によって区画されている。居住区より東側は、幅約25mの範囲に、南北の堀状の溝が2条（SD40・255）並行して掘られている。さらに、SD40の底部には3条の溝（東よりSD41→SD50→SD114）、SD255の西肩部に沿ってSD322が掘られている。これらの溝に接続する東西の溝（SD151）も検出しており、城内に水路が掘り巡らされていて、水路を使った移動が行われていたと考えられる。外側の堀（SD40）の東側では、柱穴が密集して検出され、掘立柱建物が建つことがわかった。また、同定した種実から、水路は滞水し耕作地・水田に伴うような植生がみとれ、SD50では食物残渣と思われるものが出土しているが、SD40では見られず、居住域が変化した可能性が推測されるなど、大藪城跡の東限域の様相を明らかにすることができた。特筆すべき遺物として、鞆の羽口、鋳型と思われる土製品、金属滓などが出土しているが、鋳造を行ったと思われる遺構は検出していない。

また、江戸時代の後期に2度大規模な造成工事を行っていることがわかった。整地層は室町時代の遺構面を覆っていることから、江戸時代の初頭から後期にかけての時期に、当地は非居住、非生産地域となっていた可能性がある。江戸時代後期に、人口増加などの原因によって、集落を大藪街道より東に拡張したと思われる。さらに、西半部は再度整地が行われ、東半部より一段高くなり宅地として、東半部は生産域（水田）として利用されるようになったと考えられる。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおやぶいせき・おおやぶじょうあと							
書名	大藪遺跡・大藪城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-9							
編著者名	木下保明・近藤章子・竜子正彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおやぶいせき 大藪遺跡 おおやぶじょうあと 大藪城跡	きょうとしみなみく 京都市南区 くげおおやぶじょう・ 久世大藪町・ つきやまちょうちない 築山町地内	26100	773 778	34度 57分 17秒	135度 43分 16秒	2010年4月 15日～2010 年7月23日	760m ²	道路整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大藪遺跡	集落跡	弥生時代			石器			
大藪城跡	平城跡	古墳時代			須恵器			
		長岡京期	土坑		土師器、須恵器、瓦、 土製品			
		平安時代			土師器、須恵器、瓦、 緑釉陶器、灰釉陶器			
		室町時代後期 ～江戸時代初期	掘立柱建物、柵、 柱穴、溝、土坑、 水田、畦畔		土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、木製品、 金属製品、土製品、石 製品			
		江戸時代後期	整地層、耕作溝、 井戸、土坑、柱穴		土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、木製品、 金属製品、土製品、石 製品			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-9

大藪遺跡・大藪城跡

発行日 2010年11月30日

編集

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所

京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷

三星商事印刷株式会社

住所

京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961